

錦織南遺跡

－福祉施設建設に伴う発掘調査（NKS2013-1）－

2021. 8

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は大阪府の南東部に位置しています。雄大な金剛・葛城連峰を背景に、緑豊かな自然と、人々によって紡がれた歴史に彩られた住み良いまちとなっています。これは、日々行われている発掘調査などによって、古くは旧石器時代からの人々の生活痕跡がみつまっていることから裏付けられています。

本書は、市域の南西部にて行った錦織南遺跡の発掘調査報告書です。錦織南遺跡はこれまでの調査により、縄文時代から中世に至る集落遺跡であることが分かっています。

今回の調査では、縄文時代後期～晩期と考えられる土器や、古墳時代後期以降の竪穴建物と掘立柱建物がまとまってみつかるなど、錦織南遺跡の実像にせまる、素晴らしい成果が得られました。

永きにわたって地中に残されてきた埋蔵文化財から得られたこれらの調査成果が、地域の歴史にあらたな知見を加えるきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査および本書の発刊にご協力いただきました関係者のみなさまに、感謝申し上げます。

令和3年8月

富田林市教育委員会
教育長 山口 道彦

例 言

1. 本書は、富田林市錦織南一・二丁目における福祉施設建設に伴い、富田林市教育委員会が平成 25 年度に発掘調査を行った錦織南遺跡の調査報告書である。
2. 現地調査は、富田林市教育委員会生涯学習部文化財課職員 角南辰馬の指導のもと、同課非常勤職員 水久保祥子（当時）が担当した。現地調査は平成 25 年 9 月に着手し、同年 12 月に終了した。内業調査は、現地調査と並行して行い、令和 3 年 8 月に本書の刊行をもって全ての作業を完了した。
3. 本書については水久保が執筆した原稿をもとに、同課会計年度職員 渡邊晴香が加筆及び編集し、同課非常勤職員 栗田 薫（当時）がこれを補佐した。
4. 基準点測量及び写真測量については、株式会社 島田組に委託した。
5. 木製品の保存処理及び樹種同定、及び所見（本書第 4 章）の執筆については株式会社 吉田生物研究所に委託した。

凡 例

1. 水準値は T. P. 値（東京湾平均海面値）を用い、挿図では T. P. + ●m と表示した。座標値については、「測地成果 2000」に基づいている。
2. 地層の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版 標準土色帖』を用いた。
3. 本書に用いる遺構名称は、NR（自然流路）、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SI（竪穴建物）、SK（土壇）、SL（竈）、SP（小穴・柱穴）、SX（不明遺構）としている。番号は、遺構種類ごとに通し番号を付与した。
4. 各挿図の縮尺はそれぞれの図にスケールバーを付している。個別遺構図の縮尺は 1/40・1/60・1/80、遺物実測図の縮尺は 1/4 を基本としている。
5. 参考及び引用文献については、各章文末に記した。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	3
第3章 調査の成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構と遺物	5
第4章 錦織南遺跡出土植物質遺物の樹種調査結果	29
第5章 まとめ	35

抄録

挿 図 目 次

図1 調査地周辺の主要既往調査	2	図15 竪穴建物 SI10 平面・断面図	16
図2 調査区位置図	3	図16 掘立柱建物 SB1・2 平面・断面図	18
図3 縄文土器実測図	5	図17 掘立柱建物 SB3 平面・断面図	19
図4 A区壁面土層断面図	6	図18 掘立柱建物 SB4 平面・断面図	20
図5 B区壁面土層断面図	7	図19 掘立柱建物 SB5 平面・断面図	22
図6 全体図	8	図20 掘立柱建物 SB5 断面図土色	23
図7 復元建物等配置図	9	図21 掘立柱建物 SB6 平面・断面図	24
図8 竪穴建物 SI1 平面・断面図	10	図22 不明遺構 SX1 平面・断面図、 出土遺物実測図	25
図9 竪穴建物 SI1 出土遺物実測図	11	図23 不明遺構 SX11 平面・断面図	26
図10 竪穴建物 SI2～4 平面・断面図	12	図24 不明遺構 SX2・11 出土遺物実測図	27
図11 竪穴建物 SI2 出土遺物実測図	12	図25 顕微鏡写真(1)	31
図12 竪穴建物 SI7・8 平面・断面図	14	図26 顕微鏡写真(2)	32
図13 竪穴建物 SI9 平面・断面図	15	図27 顕微鏡写真(3)	33
図14 竪穴建物 SI7～10 出土遺物実測図	15		

表 目 次

表1 樹種同定結果一覧	31
-------------	----

写 真 目 次

写真1 トレンチ1 遺構検出状況(東から)	4	写真4 トレンチ3 調査の様子(北から)	4
写真2 トレンチ2 遺構検出状況 (南西から)	4	写真5 本調査 建物床面調査の様子 (北から)	4
写真3 トレンチ3 遺構検出状況 (南西から)	4		

図版目次

図版 1

1. 調査地遠景（南西から）
2. A区全景（北西から）

図版 2

1. A区東半（北西から）
2. C区全景（西から）

図版 3

1. B区全景（西から）
2. B区全景（北東から）

図版 4

1. A区西壁断面（南東から）
2. A区北西壁断面（南東から）
3. B区南東壁断面（北から）

図版 5

1. SI 1 完掘状況（北東から）
2. SI 1 土器出土状況（北東から）

図版 6

1. SI 2・3・4 完掘状況（北西から）
2. SI 5・6 完掘状況（南東から）

図版 7

1. SI 7・8・9、SB 5 完掘状況（北西から）
2. SI 7・8・9、SB 5 完掘状況（北東から）

図版 8

1. SI 9 植物質遺物出土状況（北から）
2. SI 10 完掘状況（北から）

図版 9

1. SB 1 完掘状況（北西から）
2. SB 2 完掘状況（北東から）

図版 10

1. SB 3 完掘状況（北から）
2. SB 4 完掘状況（北東から）

図版 11

1. SB 5 完掘状況（北東から）
2. SB 6 検出状況（北西から）

図版 12

1. SD 7 断面（南西から）
2. SP 140 断面（北東から）
3. SP 155 断面（北東から）

図版 13

1. SX 1 植物質遺物出土状況（南東から）
2. SX 1 断面（北西から）
3. SD 1・SX 2 完掘状況（北東から）

第1章 位置と環境

錦織南遺跡が所在する富田林市は、大阪府の南東部に位置する。市域は東西約 6.5km、南北約 10km におよび、その中央には石川が南西から北東に向かって流れている。市域を地形的にみると、石川の東岸、金胎寺山・嶽山が位置する市域の最高所をなす部分、石川の西岸に広がる羽曳野丘陵の部分、そして両者に挟まれた石川沿いの低い平野部に分けられる。錦織南遺跡はそのうち、石川沿いの平野部に所在する（図1）。

錦織南遺跡周辺で最初にヒトの活動の痕跡が確認されるのは、石川東岸の丘陵上に位置する彼方遺跡で、後期旧石器時代に属する国府型ナイフ形石器が出土している。このほか、錦織南遺跡より 3.3km ほど北東に所在する中野遺跡で同じく国府型ナイフ形石器が（富田林市教育委員会 1982）、錦織南遺跡と中野遺跡の間に所在する谷川遺跡で有舌尖頭器が出土している（大阪府教育委員会 1995a）。ただし、遺物を伴う遺構はほとんどみつかっておらず、全貌については分かっていない。

縄文時代についても明確な遺物を伴う遺構は確認されていないが、錦織遺跡では前期の北白川下層式を中心とする遺物がみつまっている。後期～晩期になると、錦織遺跡に近接する錦織南遺跡では、縄文土器が出土する河道跡が複数確認されている（錦織南遺跡調査会 1993・1994、大阪府教育委員会 1981）。特に大阪府教育委員会の調査で検出した河道からは、篠原式中段階の一括資料が出土しており、大洞C1式の浅鉢が共伴する重要な資料となっている（大阪府教育委員会 1981）。

弥生時代では、錦織南遺跡周辺に前期から中期にあたる遺跡が少なく、喜志遺跡や中野遺跡、甲田遺跡など、主として市域の北半、石川西岸の中位段丘上に広がる。喜志遺跡からは、第I様式の壺がみつまっている（富田林市教育委員会 1997）ほか、中期には住居跡、方形周溝墓など集落の状況が確認できるようになる。後期になると市域の南東部、石川東岸の丘陵上に遺跡が多く認められるようになる。錦織南遺跡の約 0.8km 北東に位置する彼方遺跡、さらにそこから約 0.8km 東に所在する尾平遺跡（大阪府教育委員会 1995b）などで、弥生時代後期の高地性集落が確認されている。

古墳時代になると、石川西岸と東岸の丘陵上に古墳が築造され始める。前期の古墳としては、石川西岸の丘陵上に前方後円墳である甘山古墳、真名井古墳、円墳である鍋塚古墳、方墳である宮林古墳が築かれる。これらの古墳は、弥生時代中期に石川西岸に集落形態を整える喜志遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡から引き続く集団の首長墓として認識されている。また、石川東岸では、前方後円墳の可能性のある山中田1号墳、方墳である山中田2号墳、円墳である板持丸山古墳などが築造される。中期では、石川西岸に帆立貝式古墳の可能性のある川西古墳、円墳の新家古墳、東岸に彼方丸山古墳が築かれる。後期になると、石川西岸の羽曳野丘陵上に平1号墳・2号墳、宮神社裏山2号墳などが築造され、東岸に西野々古墳群、田中古墳群や群集墳である嶽山古墳群が展開する。終末期では、新堂廃寺の建立が特筆され、それに関連して、オガンジ池瓦窯跡が成立し、お亀石古墳が築造される。また、中野遺跡、錦織遺跡、別井遺跡などで韓式系土器が出土しており、富田林市域における渡来人のかかわりが想定されている。

この後の時代になると、遺跡数も相当増加している。中野遺跡、桜井遺跡、畑ヶ田遺跡、畑ヶ田南遺跡などでは古代の遺構が多数みつかっており、特に畑ヶ田遺跡では径1mに及ぶ柱穴を伴う建物が確認されており、一般の集落とは異なる性格をもつ遺跡として官衙であった可能性が指摘され

ている。中世については遺物や遺構が市域全域で確認されるようになるが、集落の様相を掴むには至っていない。

錦織南遺跡では、わずかながら中世の掘立柱建物跡が確認されている。大阪府教育委員会と富田林市教育委員会が実施してきた過去の調査では、旧国道 170 号の西側において奈良時代から中世の掘立柱建物、井戸などの集落に関連する遺構が検出されているのに対し、東側ではピットや溝は数基検出されているだけで河道跡が主となっており、遺跡の中心がおおよそ旧国道 170 号線の西側に展開するとみられている（大阪府教育委員会 1986 ほか）。

また、1994 年の調査では、旧国道西側においても河道がみつかっており（錦織南遺跡調査会 1994）、旧地形の状況も含めて次第に錦織南遺跡の内容が明らかになりつつある。

【参考文献】

大阪府教育委員会 1981 『錦織南遺跡—縄文時代晩期河道の調査—』
 大阪府教育委員会 1985 『大阪府文化財調査概要 1984 年度』
 大阪府教育委員会 1986 『錦織遺跡発掘調査概要—富田林市錦織所在—』
 大阪府教育委員会 1995a 『大阪府立富田林高等学校改築工事伴う谷川遺跡発掘調査概要・I』
 大阪府教育委員会 1995b 『柿ヶ坪・尾平・寛弘寺遺跡発掘調査概要—一般国道 309 号富田林バイパス建設に伴う発掘調査—』
 富田林市遺跡調査会 2003 『甘山南古墳』
 富田林市遺跡調査会 2005 『富田林寺内町遺跡』
 富田林市教育委員会 1982 『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』
 富田林市教育委員会 1996 『平成 7 年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』
 富田林市教育委員会 1997 『平成 8 年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』
 富田林市教育委員会 2003 『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』（本文編）
 富田林市史編集委員会 1985 『富田林市史 第一巻』
 錦織南遺跡調査会 1993 『錦織南遺跡』
 錦織南遺跡調査会 1994 『錦織南遺跡Ⅱ』

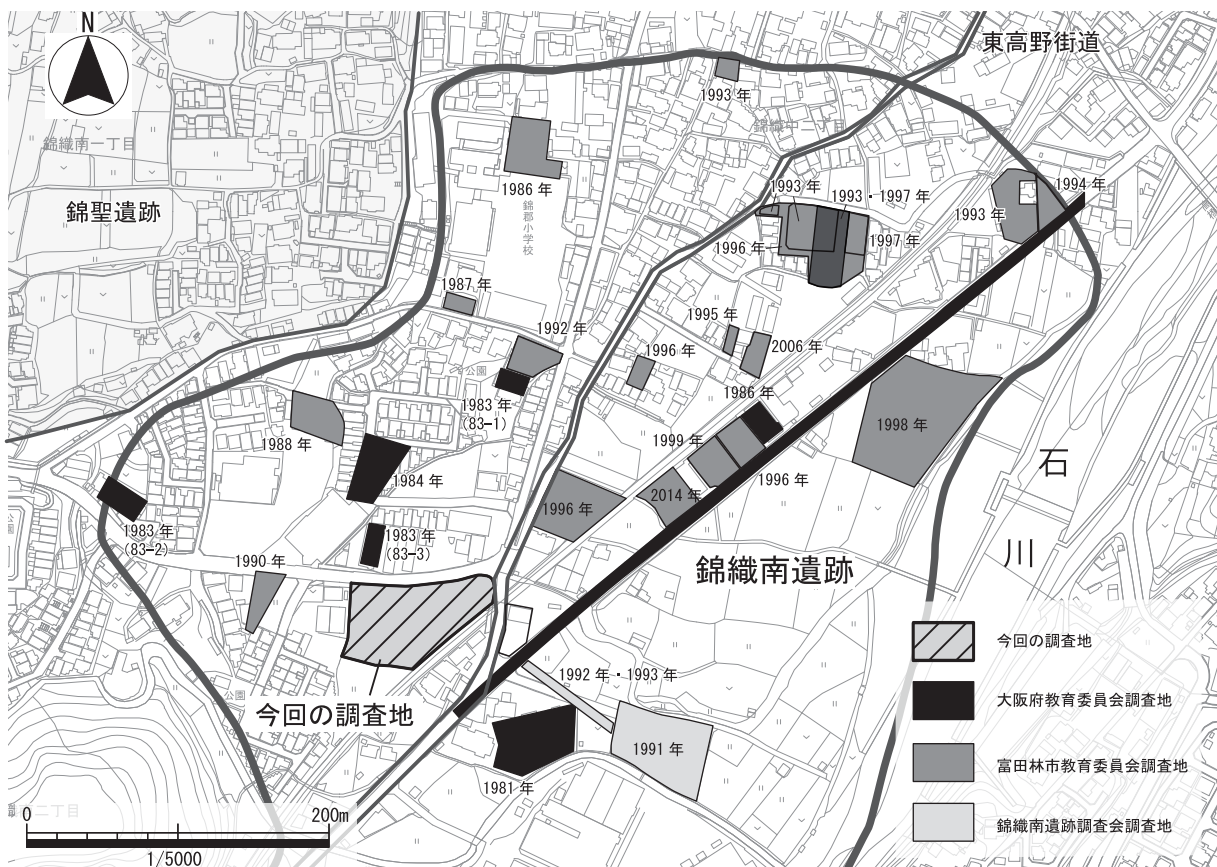


図 1 調査地周辺の主要既往調査

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯と経過 (図1・2、写真1～5)

錦織南遺跡は、石川西岸の低位段丘上に所在し、近鉄長野線滝谷不動駅の南西に広がっている。その範囲は南北 630m、東西 470mにおよぶ。過去の分布調査によって、弥生時代から中世に至る複合遺跡として知られていた。しかし、1981年に大阪府教育委員会が実施した調査によって縄文時代晩期の河道が発見され、遺跡の時期がさらに遡ることが判明した(大阪府教育委員会 1981)。

今回の調査地は遺跡の中心からやや南寄り、旧国道 170 号の西側に所在する。当該地において高齢者福祉施設の建設が計画された。周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届が提出され、富田林市教育委員会が 2013 年 7 月 8 日から同年 7 月 10 日にかけて事前確認調査を行った。

トレンチは 3 か所 (1 m×19m、1 m×16m、1 m×15m) 設定した(図 2)。地表面より -1.10 ~ 1.45m の盛土の下に耕作土や包含層が残り、-1.65 ~ 1.9m で地山に至る。この地山直上とその 1 層上面において、小穴や落ち込み状の遺構と遺物が検出され、特にトレンチ 2 では遺物の出土量が多かった。この調査結果を基に開発者と協議を行った結果、本体建物と防火水槽の建設予定部分において本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の方法 (図2、写真5)

事前確認調査の結果により、盛土が 1 m を超える厚さになることから廃土の量が多くなることがわかった。これにより、発掘調査時の廃土置場を確保するため、本体建物建設予定範囲については反転調査を行うこととなった(A・B区)。防火水槽部分(C区)については、反転後のB区を調査するタイミングで調査を実施した。

現地表面から遺構面までの深度が深いため、機械掘削については途中で犬走り部を設けて掘削を行った。また、湧水が激しく、脆弱な地盤であることから、調査区壁にはコンパネによる土留めを施しながら安全に配慮し、調査を実施した。

遺構検出については、本来の帰属遺構面でははっきりと検出できない遺構が多いことから、地山上面ですべての遺構検出を行った。

現地本調査は 2013 年 9 月 17 日から同年 12 月 26 日まで行い、調査面積は A・B・C 区を合わせて 2,002 m² である。

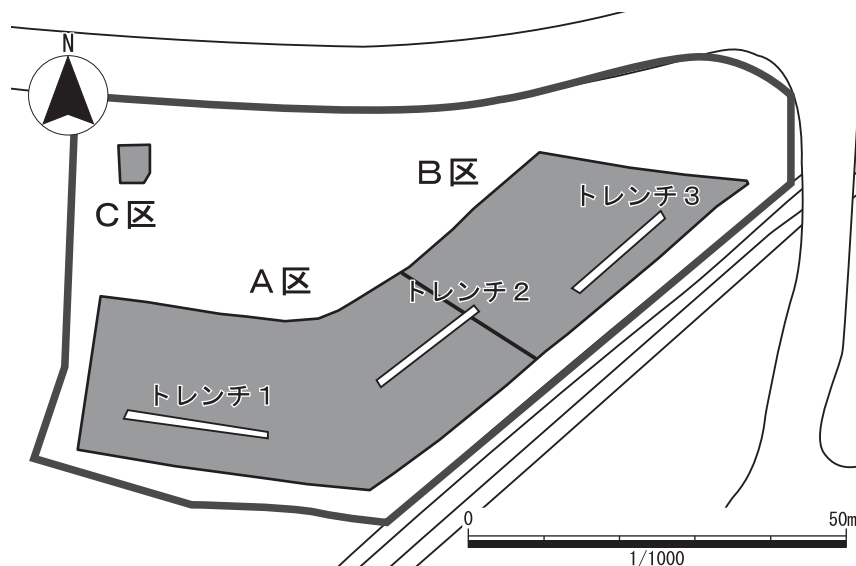


図2 調査区位置図



写真1 トレンチ1 遺構検出状況（東から）



写真2 トレンチ2 遺構検出状況（南西から）



写真3 トレンチ3 遺構検出状況（南西から）



写真4 トレンチ3 調査の様子（北から）



写真5 本調査 建物床面調査の様子（北から）

第3章 調査の成果

第1節 基本層序 (図4・5、図版4)

基本層序については、調査地の東西で大きく異なる。調査区西壁の層序は、北と南で盛土 (図4-1層) の厚みが異なり、0.4～1.5mの差異がある。この盛土の下は整地土 (図4-2層) が0.3～0.4m、その下に黄灰色細砂～中砂混砂質シルト・明黄褐色細砂～中砂混砂質シルト層 (図4-10層) が0.2m堆積する。遺構の多くはこの10層上面の遺構である。その下は地山 (図4-11・14以下の地層) となる。

南東壁では盛土 (図5-1層) が1.2～1.5mの厚さとなり、その直下は耕作土層 (図5-2～4層)、さらにその下は主ににぶい黄色中砂～大礫混シルト質砂層 (図5-5層)、黄灰色中砂～細礫混砂質シルト層 (図5-6層)、灰黄褐色中砂～中礫混砂質シルト層 (図5-7層) の3層が0.05～0.1mの厚さで水平堆積している。さらにその下の灰色中砂～粗砂混砂質シルト層 (図5-8層) も0.05m程の厚さの層で、この地層を除去したところで (図5-9層上面) 大半の遺構 (図5-10・12・13層など) が切り込んでいる。これらの遺構が浅いことなどから、本来の遺構面は削平を受けていると考えられる。特に図5-2層が北へ向かって0.4～0.5m下がる場所 (B区南端より北へ7m付近) では、地山直上に4層が堆積しており、4層以下に堆積していた地層は4層が堆積するまでに削平されたと考えられる。図5-9層は褐灰色中砂～細礫混砂質シルト層に青灰色中砂～細砂混砂質シルトブロックが混じる層で、その下が地山 (図5-11・15層など) となる。北東部で検出したSX10 (図5-24層)・11 (図5-26～30層) などは地山直上に属する遺構である。

第2節 遺構と遺物

遺構はA区西端およびB区北東端において希薄ではあったものの、A・B区のほぼ全域にわたって検出された (図6・7、図版1～3)。地山直上面とその上層の包含層上面に帰属しているものが大半である。なお、C区では遺構は検出されなかった (図版2-2)。

遺物は古墳時代後期を主とし、縄文から中近世まで幅広く出土した。

1) 縄文時代

今回の調査では、後述する古墳時代以降より古い時代について、遺物を伴う明確な遺構は確認できなかった。その中で、自然流路NR2 (図7) からは中津式土器が数点出土している。この流路はトレンチ調査しか行っておらず、土砂の流入によって埋没した時期は不明であるが、上流の縄文時代の遺跡・包含層が削られ、土砂と共に運ばれたものと考えられる。縄文土器については新しい時期の遺構や地層にも混じって散見された。

縄文土器 (図3) 図化した土器はいずれも後期のものである。調査地周辺の既存の調査でも縄文時代後期～晩期の土器や石器が多くみつかっている (第1章)。

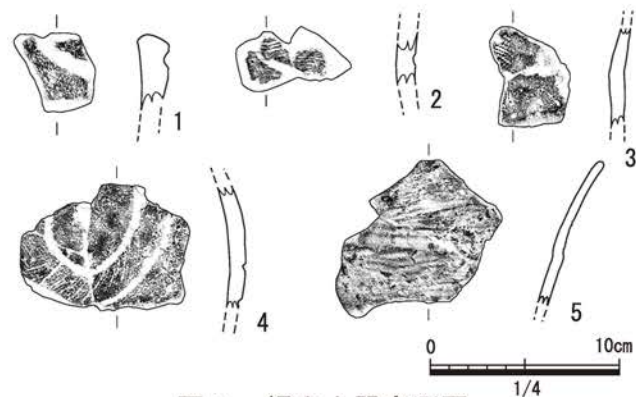


図3 縄文土器実測図

(1: SX6、2: NR1、3: SI7、4: A区5層以下、5: SP138)

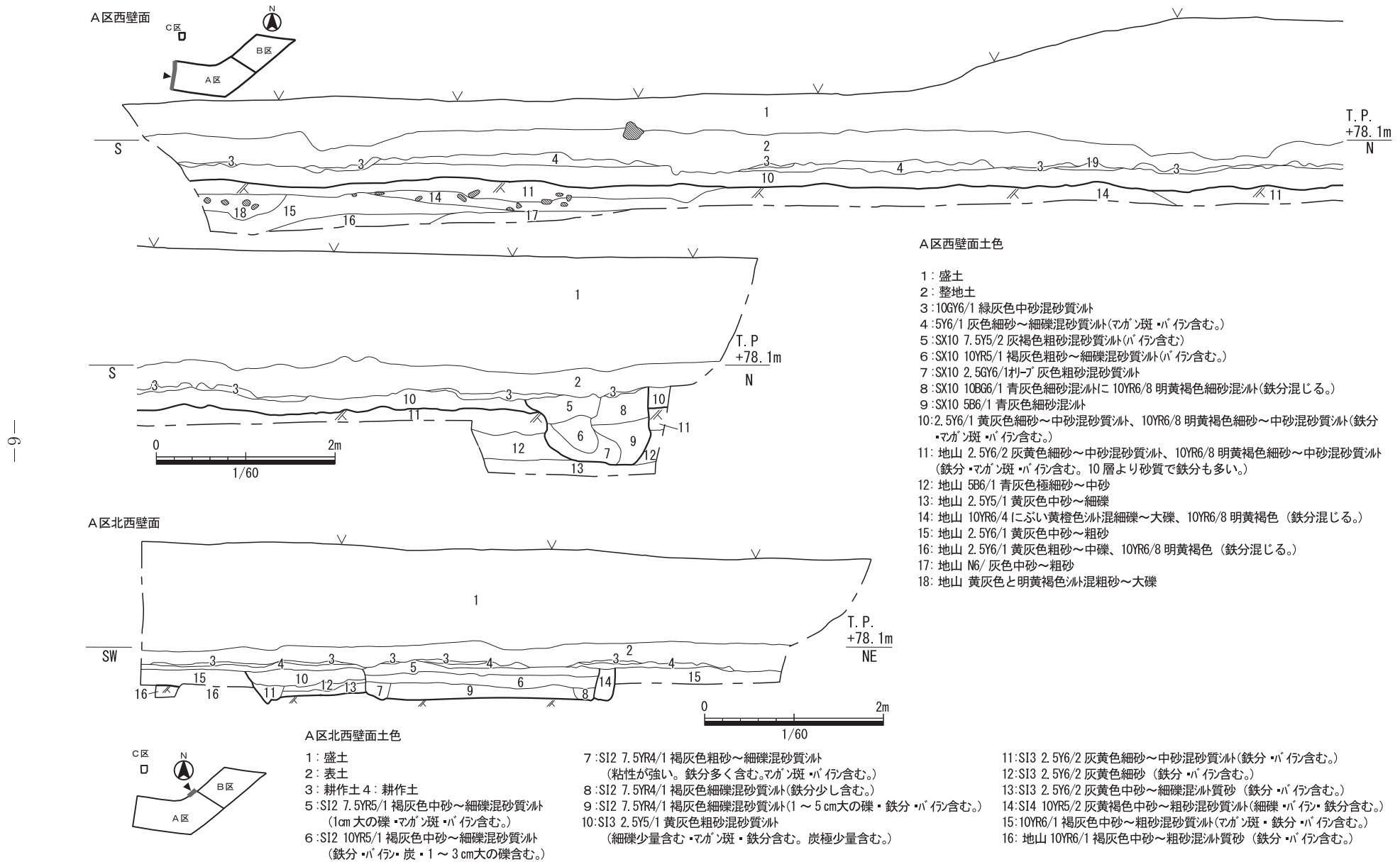


図4 A区壁面土層断面図

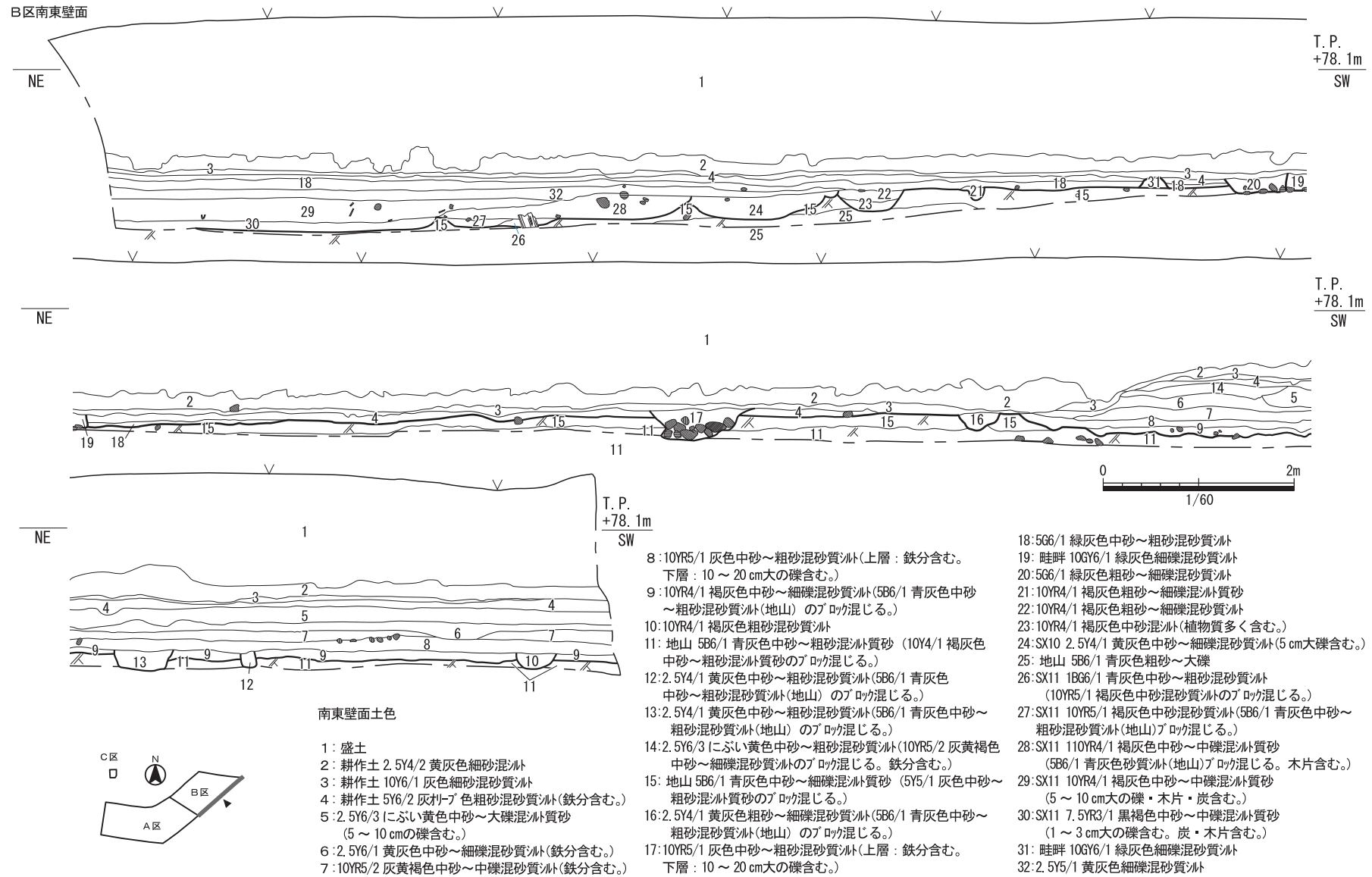


図5 B区壁面土層断面図

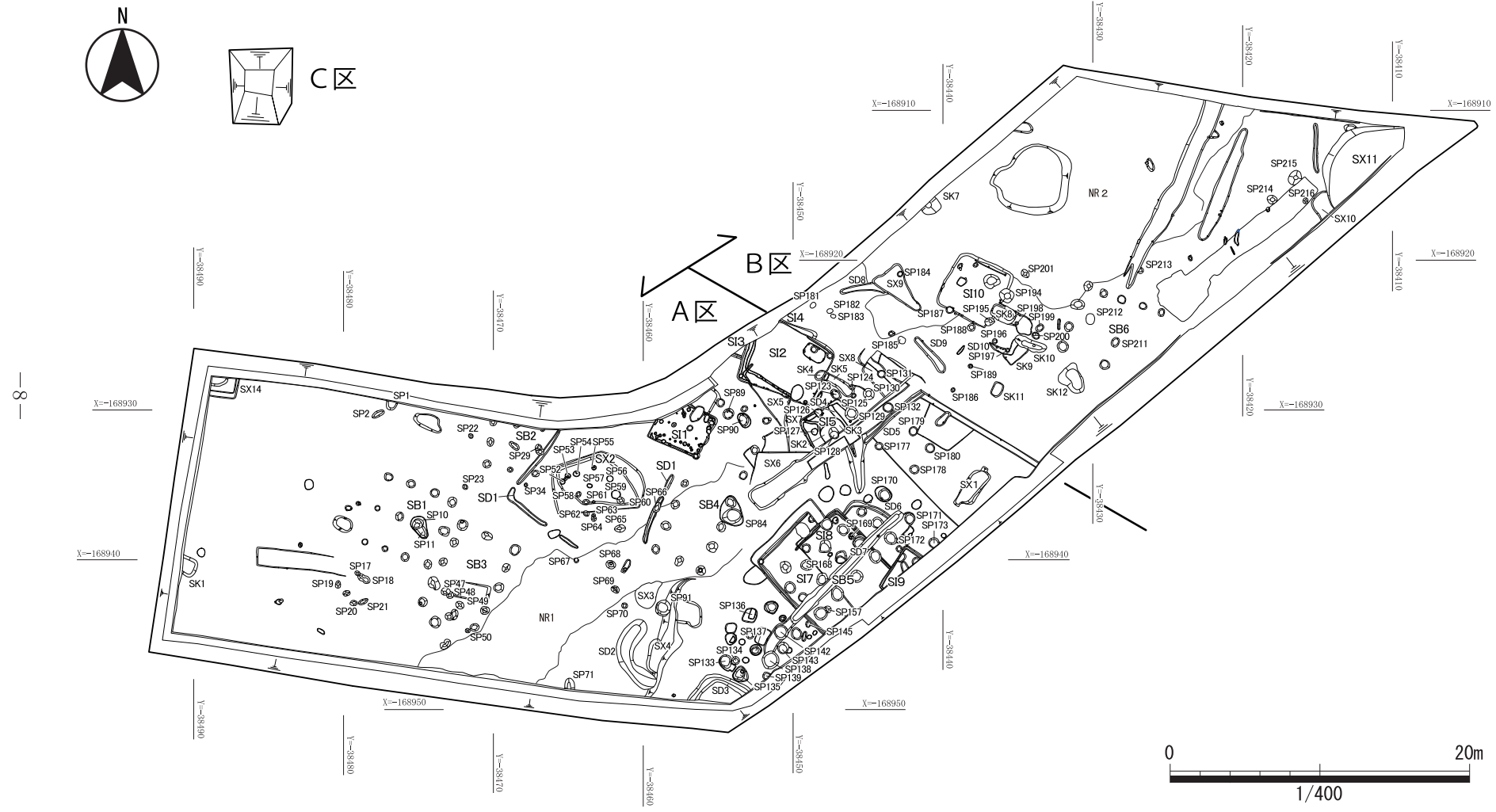


图6 全体图

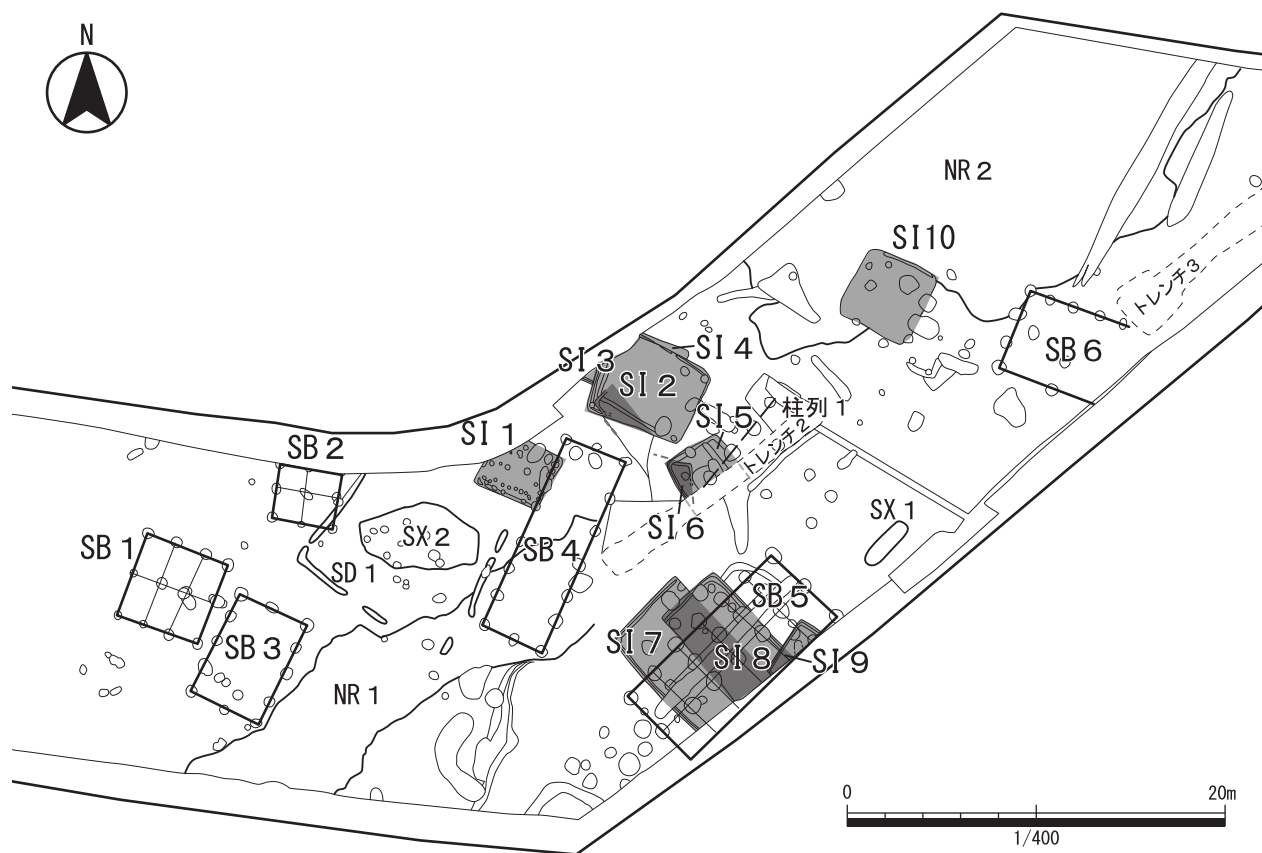


図7 復元建物等配置図

深鉢(4)は凹線と凹線の間にはLR縄文が施されている。これ以外に凹線による文様を施すものは(1)と(2)があるが、器種は不明である。(2)は凹線を挟み片側に縄文、もう一方は磨きによる調整がなされている。深鉢(5)は口縁端部を丸くおさめ、外面には二枚貝による貝殻条痕が確認できる。また、小片であるが、外面上端部に縄文がわずかに残るもの(3)もある。(1・2・4)は中津式土器、(5)は北白川上層式土器と考えられる。このほか、試掘調査時に北白川C式～中津式の土器も出土している。

2) 古墳時代以降

遺構はA・B区の境界辺りで密度が濃くなり、竪穴建物や掘立柱建物が複数棟みつまっている。

溝

溝は11条検出した。規模・方向などは様々であり、溝状を呈している遺構という括りのものを取り扱った。それぞれの遺構からの出土遺物が少ないことから、時期も不明なものが多い。

SD1 (図7、図版13-3)

A区の中央やや東寄りで検出した溝状遺構である。幅0.09～0.47m、深さ0.03～0.06mであり、溝は途中途切れながらコの字型に巡る。検出した範囲は、北東-南西9.4m×北西-南東7.1m以上である。

溝の一部は自然流路NR1を切り、掘立柱建物SB2を構成する柱穴に切られている。竪穴建物の痕跡とするには大型であることから、何らかの区画溝である可能性を考えた。SD1の内側には規模も並びも不規則な小穴と落ち込み状の遺構SX2を検出している。これらの遺構自体は建物などの構造物となるとは考えにくく、浅い溝で囲う必要性を見い出せず、SD1の性格については不明と言わざるをえ

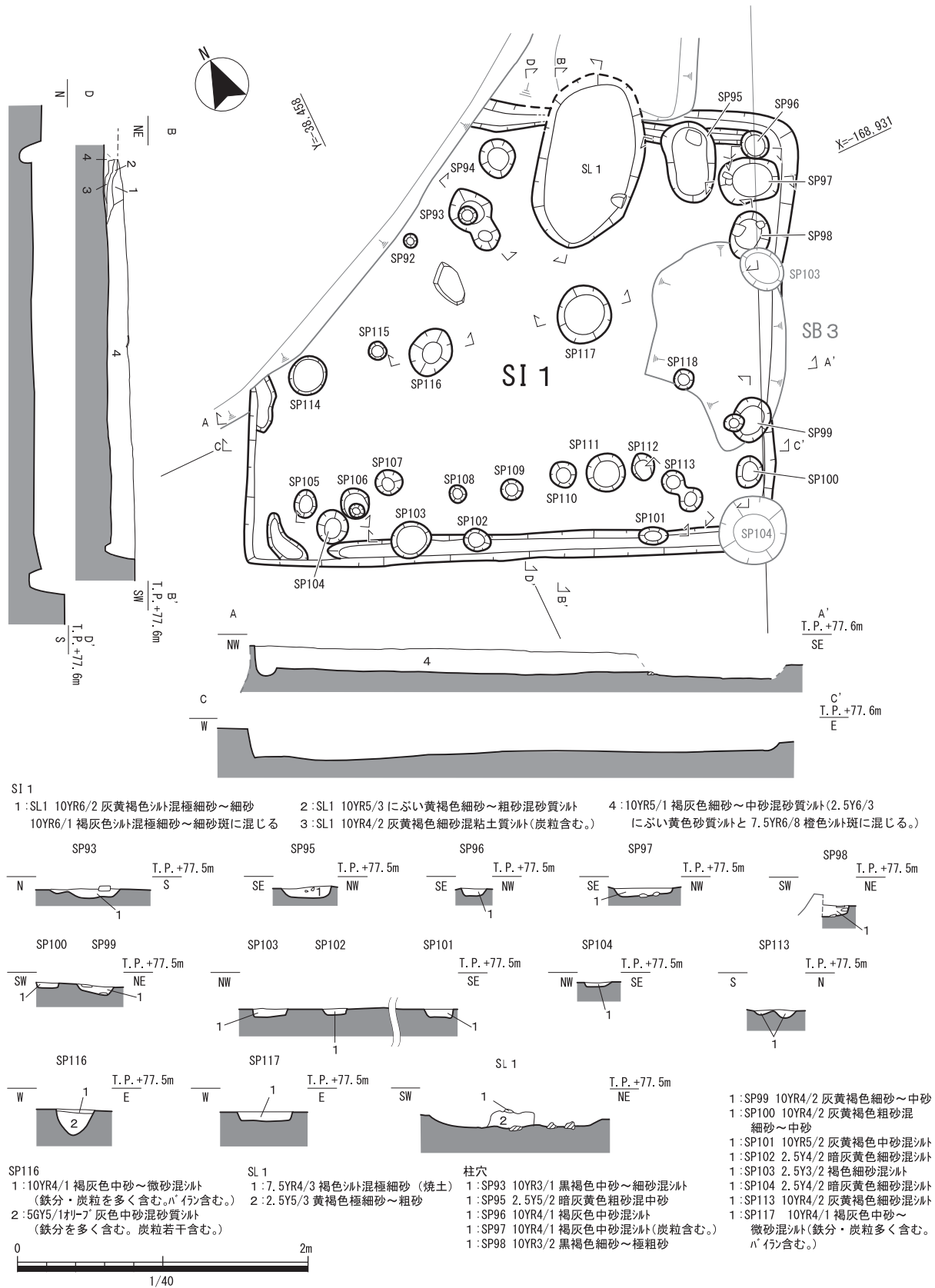


図8 竪穴建物 SI 1 平面・断面図

ない。

竪穴建物

竪穴建物は少なくとも 10 棟検出した(図7)。壁溝になる可能性をもつ溝状の遺構や、方形に落ち込んだ浅い遺構など、建物の壁溝となりえる遺構自体はもっと多かった。竪穴建物はA・B区の中央部に集中してみつかっており、概ね同じ場所で角度を変えたりしながら数度にわたって建て替えられた

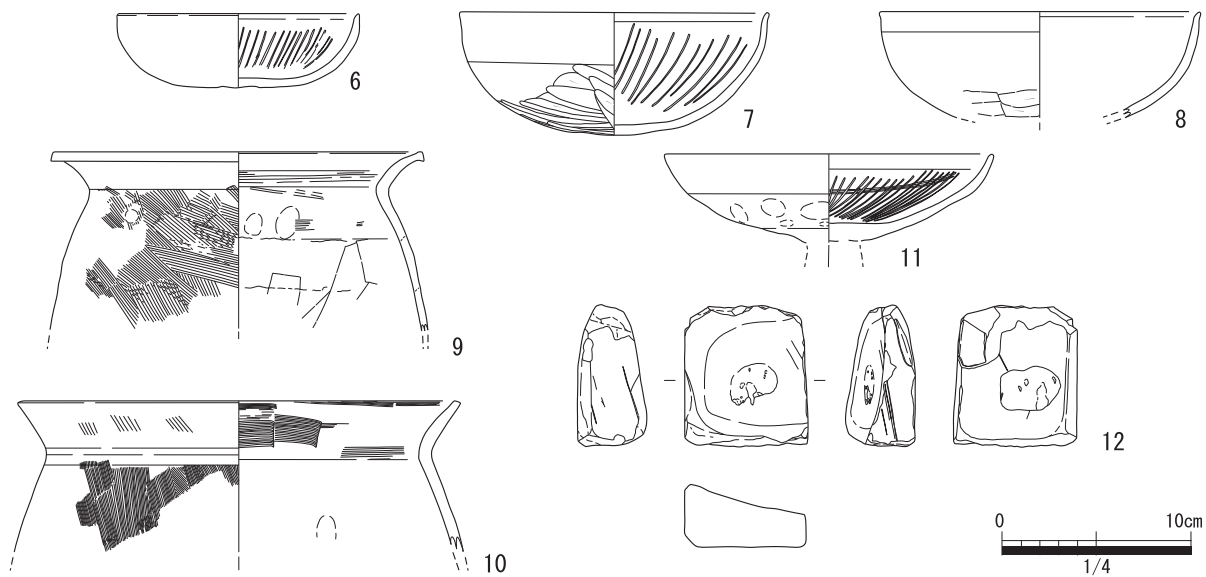


図9 竪穴建物 SI 1 出土遺物実測図

状況が窺える。

SI 1 (図7～9、図版5)

A区中央北側で検出した(図7)。竪穴の規模は北東―南西辺 3.0m、北西―南東辺 3.6mの方形で、小規模の建物である(図8)。北西―南東辺の一部や南東壁付近に攪乱を受け、南東壁側では掘立柱建物SB4の柱列によって切られている。

壁溝は四方を巡らず、南西辺と北東辺で検出した。幅 0.1～0.2m、深さ 0.04～0.06mである。建物内で小穴を数多く確認した。小穴の規模・位置関係からみて中央付近で検出した SP116・117 の2基が支柱穴となると考えられる。また、南西辺には壁溝の内側に径 0.2m弱の小穴が並んでいるが、他の辺にはみられない。壁を支える杭状のものと考えられるが、1辺にしか設けられていない理由については判然としない。

北東辺には、竈の痕跡と思われる焼土および灰土が広がる範囲(SL1)を確認した。竈本体はほぼ破壊されていると考えられ、被熱の痕跡などもみられなかった。その範囲は長辺 1.1m以上、短辺 0.7mの楕円形である。

出土遺物には、土師器・須恵器・サヌカイト剥片・石製品がある(図9)。図化した遺物の内、土師器坏C(6～8)・高坏(11)・甕(9)は竪穴建物床面から、土師器甕(10)は建物理土から、砥石(12)は SP93 から出土した。特に、床面から出土した遺物は竈の東側付近でまとまって出土している。この他、SP98・100からは土師器の細片が出土した。須恵器については細片しか出土しておらず、図化できなかった。

土師器坏C(6)は口径 12.6 cm・器高 3.9 cm、(7)は口径 16.2 cm・器高 6.5 cm、(8)は口径 16.8 cm・器高 5.5 cm以上である。(6・7)は内面に放射状暗文が施されるが、(8)は摩耗の為確認できなかった。砥石(12)は凝灰岩質の石材で、基本的に広い面2面を使用している。

SI 2～4 (図4・7・10・11、図版4-2・6-1)

A区北東隅で検出した(図7)。複数回建替えられたと考えられ、一番新しい建物を SI 2 とした。SI 2 の竪穴の規模は北東―南西辺 4.0m、北西―南東辺 5.1mの方形である(図10)。壁溝の規模は、幅 0.1～0.3m、深さ 0.1mで、南東辺のみ確認できなかった。建物内では建物角を中心に柱穴(SP119

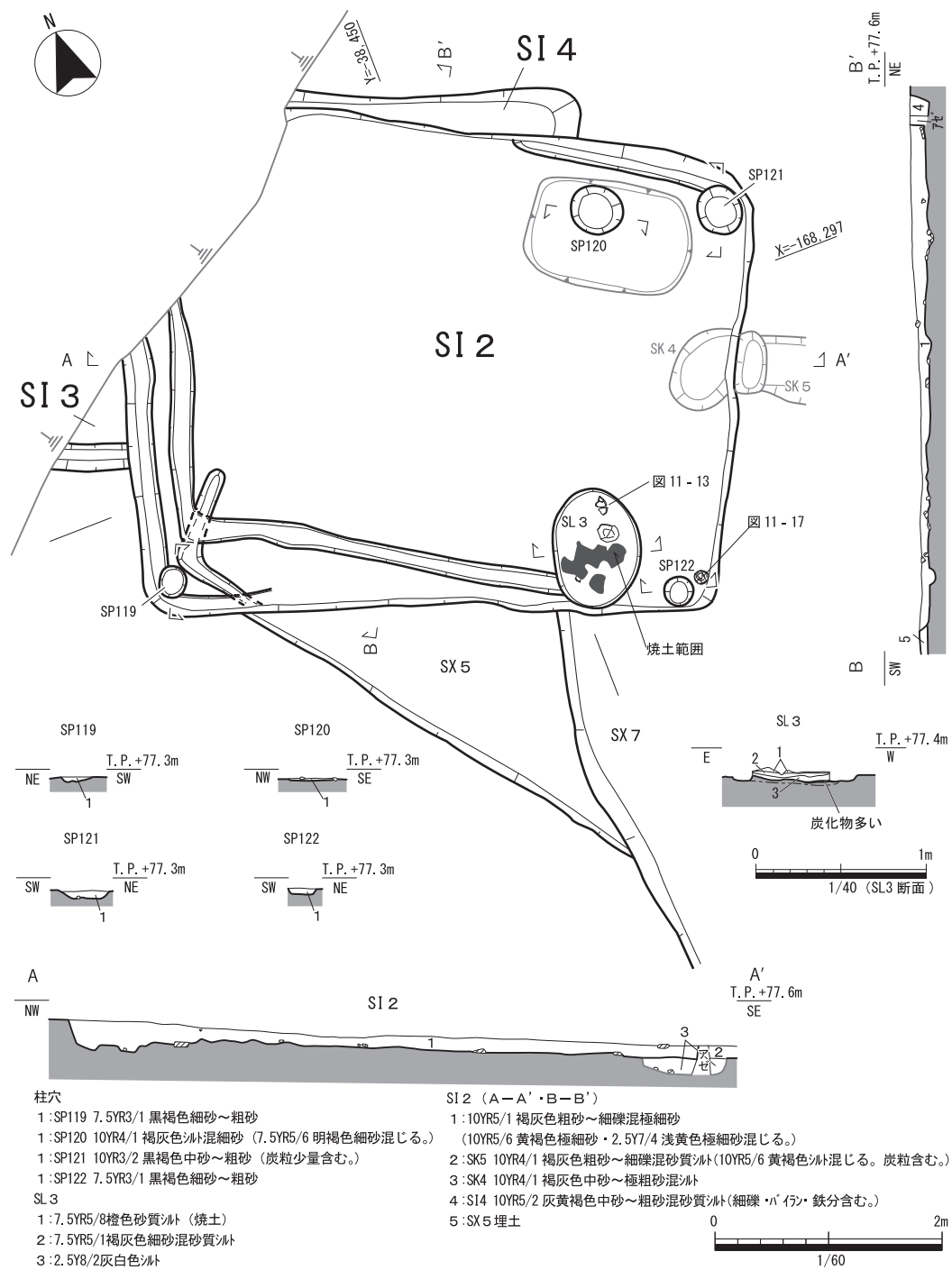


図10 竪穴建物 SI 2～4 平面・断面図

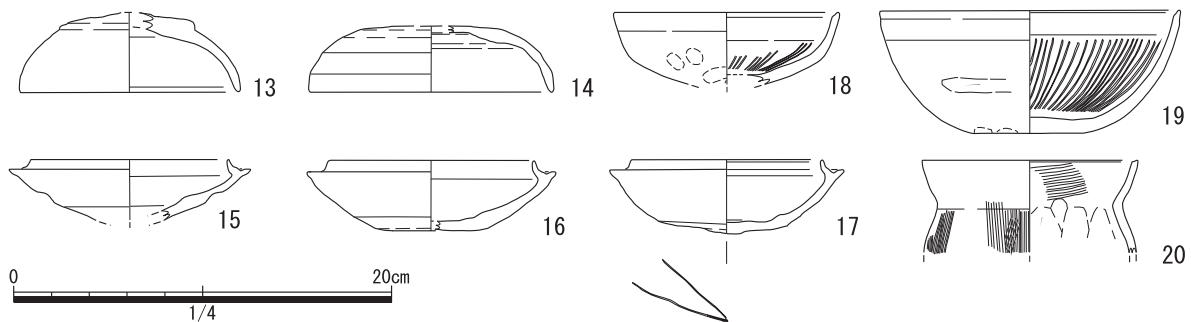


図11 竪穴建物 SI 2 出土遺物実測図

～122) を4基検出した。また、南東部分には竈の痕跡と思われる焼土が集中する箇所 (SL3) が見られた。SI2の西角では壁溝が3条に重なり、内1条は角度を大きく振り、コーナー部分だけ検出した。この角度を振る溝の南東方向に延長した先には不明遺構SX5があり、この溝に伴う建物の床面の広がりとなる可能性がある。

また、SI2に切られる形でSI3・4を検出した (図4・10)。SI3・4は同一建物の可能性があるが、SI2の削平により確認できなかつた。これらの竪穴建物はA区北西壁面断面 (図4下) をみると、いずれも地山直上に堆積する地層 (図4下-15層) 上面から切り込んでいるのが分かる。

現地調査では上記の様に竪穴建物を復元した。しかし、SI2の竪穴の平面プランについては、SL3から西へ延びるL字の壁溝ラインが竪穴の北東-南東ラインと合う。このことから、こちらの平面プランがSI2となり、その場合には竪穴の西辺から南辺のSL3辺りまでの上端ラインがSI4と組み合うと考えることもできる。ただし、遺構検出の際にはそのように検出できず、検出時のプラン通りに復元した。

出土遺物には、須恵器・土師器・石製品がある。このうち、土師器坏C (18・19)・甕(20)、須恵器坏H (15～17)・坏H蓋 (13・14) を図化した (図11)。

須恵器坏Hは(17)が口径10.1cm・器高3.9cm、外面底部にへら描きが施されている。(15)は口径10.4cm、(16)は口径10.6cm・器高3.8cm、底部内面には鉄分が付着している。(17)は口径10.1cm・器高3.9cmで、SP122のそばで出土した。坏H蓋は(13)が口径11.6cmで焼成不良である。SL3埋土から出土した。(14)は口径12.8cm・器高3.5cmである。土師器坏Cは、(18)が口径11.6cm、(19)が口径15.8cm・器高6.5cmである。甕(20)は口径11.4cmと、小型の甕である。SL3埋土から出土した。

SI5 (図7、図版6-2)

A区北東部分で検出した。複数の遺構が重なり合っているため非常に不明瞭で残存状態も悪いが、壁溝と思われる溝が確認できた。検出した竪穴の規模は、北東-南西辺3.3m、北西-南東辺2.1m以上の方形である。SI6を切り、南東半部を試掘トレンチ2によって切られ、試掘坑よりさらに南東側では建物痕跡を確認できていない。建物が試掘トレンチ2の範囲を超えないのであれば、北西-南東辺は約3.2mとなる。壁溝の幅は0.21～0.25m、深さは0.1mである。

出土遺物は、床面からはほとんどみつからず、埋土から須恵器坏身・坏蓋・高坏坏部、土師器甕・把手・坏が出土したものの、大半は細片である。

SI6 (図7、図版6-2)

SI5と重複して検出した。SI5によって削平されたものと思われ、確認できたのは壁溝の北東角の一部のみである。また、SI5の範囲外に継続していくはずの竪穴・壁溝は不明瞭で検出できなかった。ただし、延長上の地表面が変色していることから、床面の範囲を示している可能性がある。出土遺物は少量であり、SI5埋土と掘り分けることができなかつた。

SI7 (図7・12・14、図版7)

A区南東部分で検出した (図7)。竪穴の規模は北西-南東辺6.6m以上、北東-南西辺4.8mの長方形である。建物の北東部から南東半部は、SB5とSD7、SI8により切られ、削平を受けている。

壁溝は、建物の北西辺から南西辺にかけて検出した。規模は、幅0.04～0.3m、深さは0.1～0.3mである。北東-南西辺の隅に近いところで2基 (SP162・163) の柱穴を検出した。SP162の平面は円形を呈し、規模は長径0.38m・短径0.32m・深さ0.2mである。SP163は竪穴壁にかかっており、径0.41m・

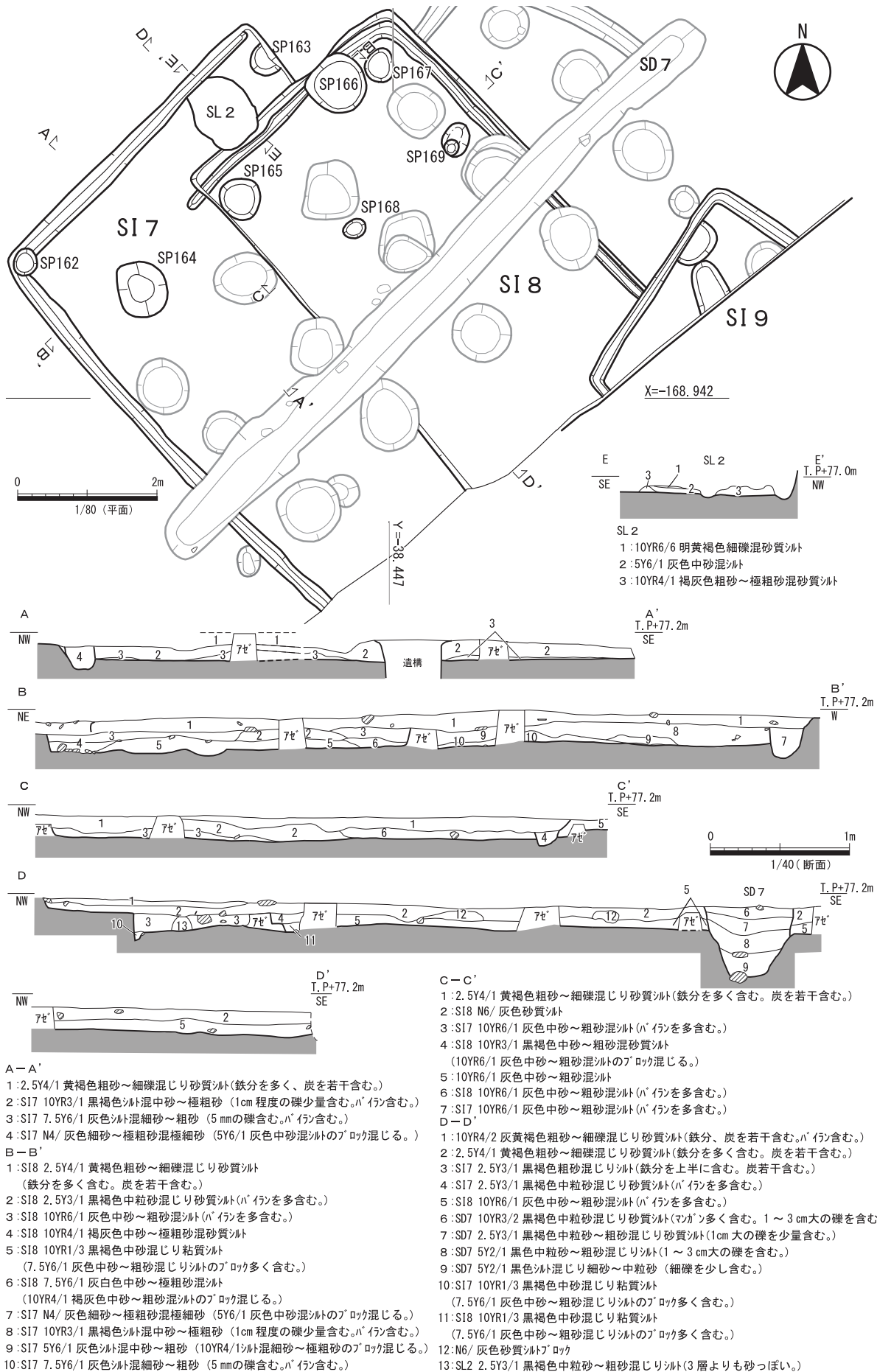


図12 竪穴建物 SI 7・8 平面・断面図

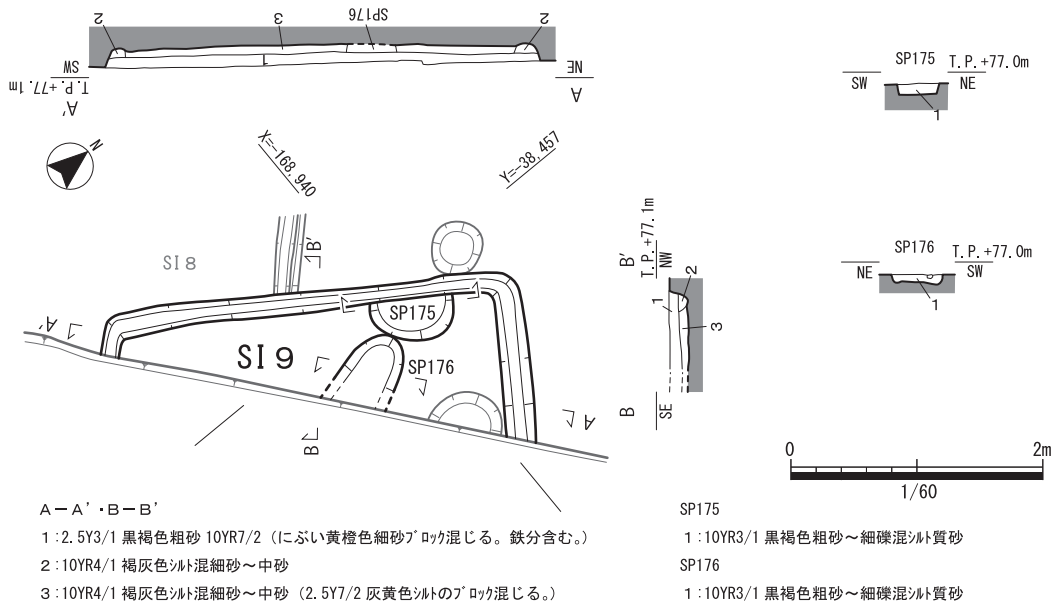


図 13 竪穴建物 SI 9 平面・断面図

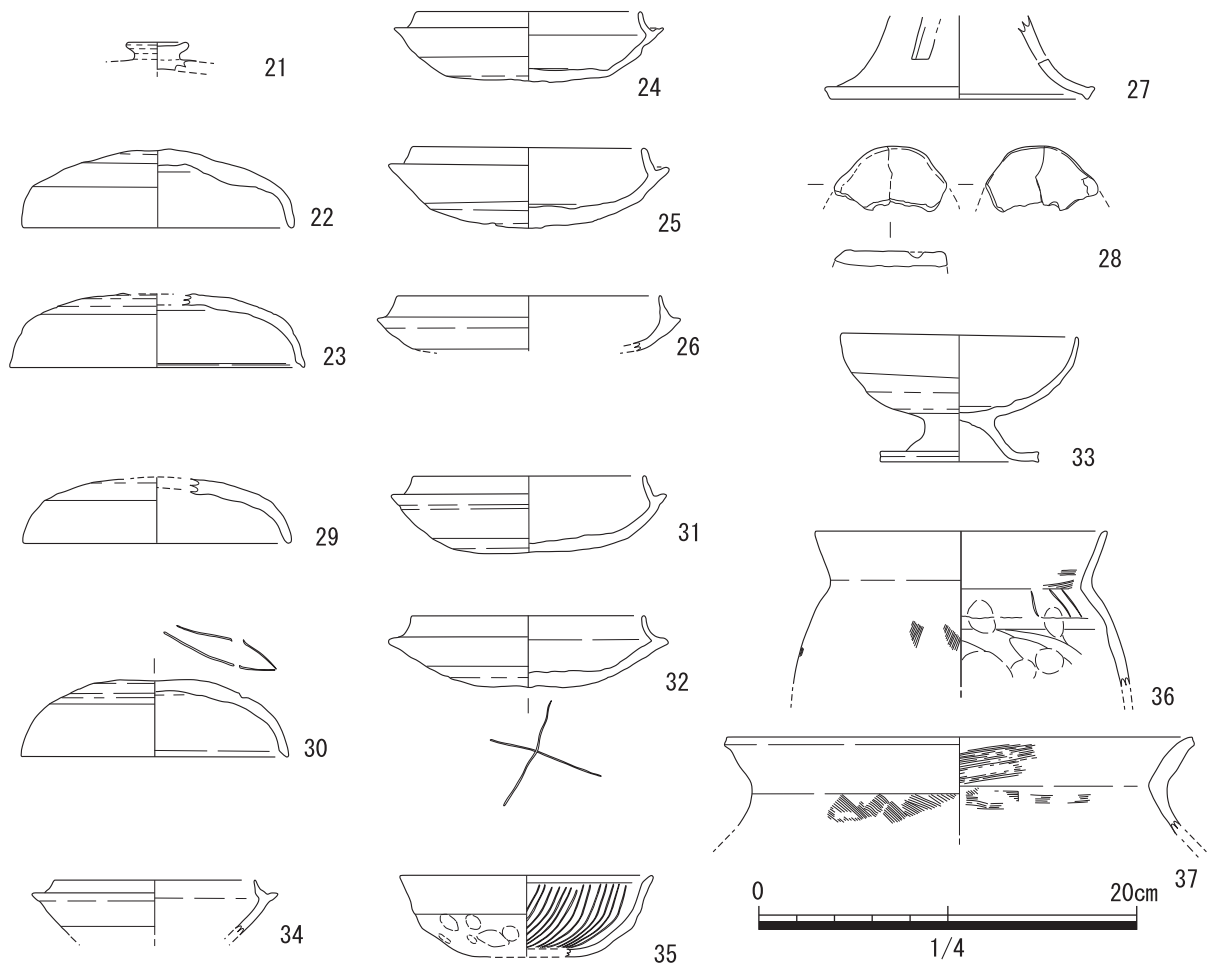


図 14 竪穴建物 SI 7～10 出土遺物実測図
SI7 (21～28)、SI8 (29～32)、SI9 (33)、SI10 (34～37)

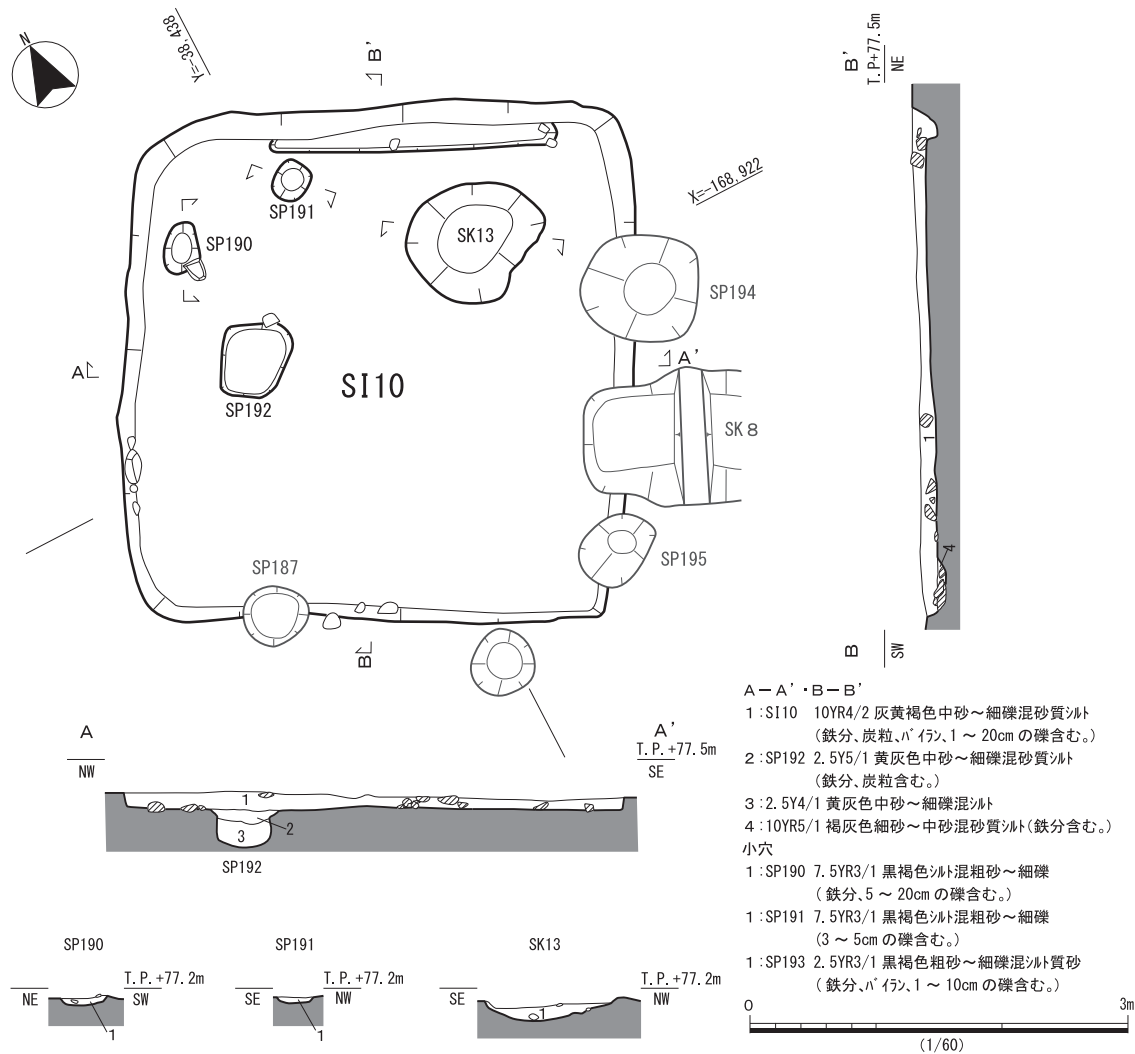


図15 竪穴建物 SI10 平面・断面図

深さ0.13mである。このほか、SP164は竪穴建物内の西部で検出した。平面は不正円形を呈し、長径0.78m・短径0.68m・深さ0.33mである。

建物内からは、南西部分で須恵器坏蓋(22)、建物内の南西辺中央部において須恵器坏身(25)の完形品が出土した。他には、須恵器坏身・坏蓋・高坏、土師器甕・羽釜、縄文土器片(LR縄文あり)、甕形の製塩土器、サヌカイト剥片、不明石製品が出土した。

図化した遺物は須恵器坏H(24～26)・坏H蓋(22・23)・蓋(21)・高坏(27)、不明石製品(28)である(図14)。坏H(24)は口径11.8cm・器高3.7cmで、底部内面の同心円当て具痕をナゲ消している。(25)は、口径12.2cm・器高4.2cmで、焼成時に焼き歪んでいる。高坏(27)は方形のスカシが3方に復元できる。不明石製品(28)は長辺6.0cm以上・短辺3.2cm以上で、0.5cm程の礫を含む砂岩製である。天井面と縁面は滑らかで人工的なものと考えられるが、摩耗しているのか磨かれているのかは判然としない。0.5cm程の厚さに剥離している。

SI8(図7・12・14、図版7)

A区南東部分で検出した(図7)。北西-南東辺5.9m以上、北東-南西辺3.7mの長方形である(図12)。SI7より後出する形で重複している(図12)。

壁溝は建物の北東辺から北西辺にかけてのみ検出した。壁溝の規模は、幅0.13～0.18m、深さ0.06～

0.07mである。北西辺の壁溝は竪穴範囲より南西方向へ延びており、建て替えなどにより建物規模が縮小された痕跡と考えられる。建物内では、SB5を構成するピット以外に5基のピットを検出したが、SI7と同じく、明確に支柱穴との判断には至らなかった。SP165は北西壁付近、SP166は北西壁際、SP167は北東隅、SP168は建物中央部分、SP169は北東壁付近で検出した。SP167～169はその規模が小さく、長径0.33～0.48m、短径0.25～0.40m、深さ0.12～0.17mである。SP165は径0.58mの平面は円形を呈し、深さ0.13mを測る。SP166は、径0.78mの円形を呈し、深さ0.37mを測る。また、SI8に付属する竈の痕跡と思われる焼土の集中箇所(SL2)を北西壁からその外側にかけて確認した。

出土遺物は、建物南西辺において須恵器坏身の完形品(31)が1点出土している。その他、須恵器坏・坏蓋・甕・丸底壺と思われる底部片、土師器甕などが出土している。

図化したのは須恵器坏H(31・32)・坏H蓋(29・30)である(図14)。坏H(31)は口径12.2cm・器高4.1cm、(32)は口径12.2cm・器高3.8cmで、底部内面の同心円当て具痕跡をナゲ消している。坏H蓋(29)は口径14.0cm・残存高3.4cm、(30)は口径14.0cm・器高4.0cmである。(30・32)は外面にヘラ記号が施される。

SI9(図7・12～14、図版7・8-1)

A区南東部分の調査区際で検出した(図7)。北東-南西辺3.3m、北西-南東辺1.4m以上で、SI8を切って重複している(図12)。規模は、一辺の計測であるが、一辺が3.3mとSI1の規模に近似している。

埋土は2層に分けられる(図13-A-A' 1・3層)。1層は埋土、3層が建物の床面を構成する層で、第3層上面が床面と考えられる。竪穴内では1層下より小穴2基(SP175・176)を検出した。壁溝は、幅0.06～0.23m、深さ0.05～0.08mで、北角辺りの壁溝底からは植物質遺物が出土した(図版81)。

建物埋土からの出土遺物は須恵器坏身、土師器の細片が出土したのみである。須恵器高坏C(33)は短脚で、口径12.4cm・器高6.8cm・脚部径8.3cm、焼成時に焼き歪んでいる(図14)。SP175・176から出土した破片が接合した資料である。

SI10(図7・14・15、図版8-2)

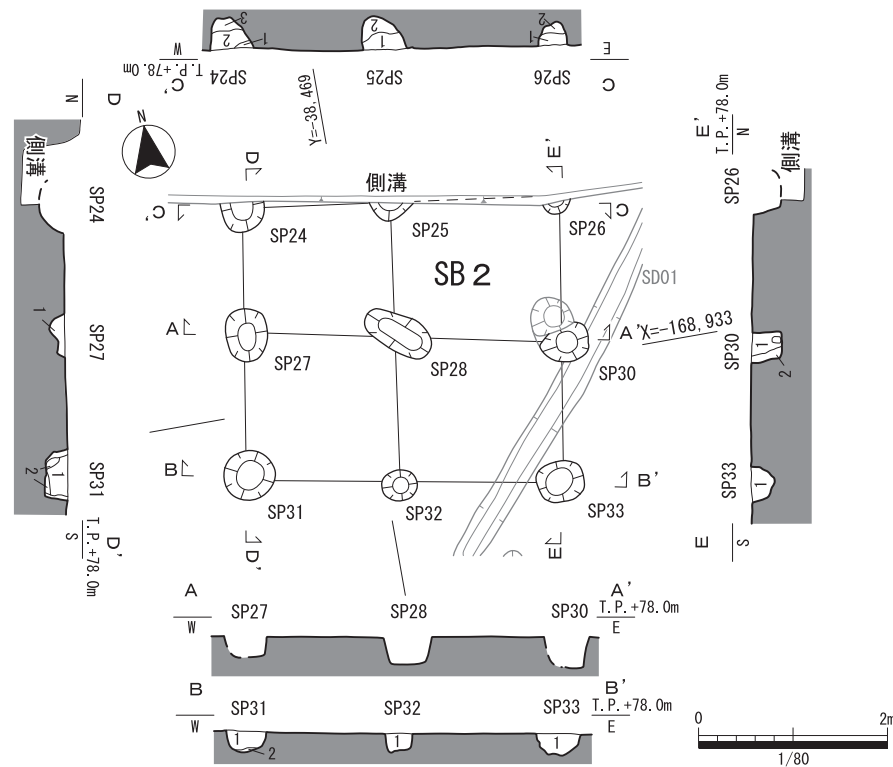
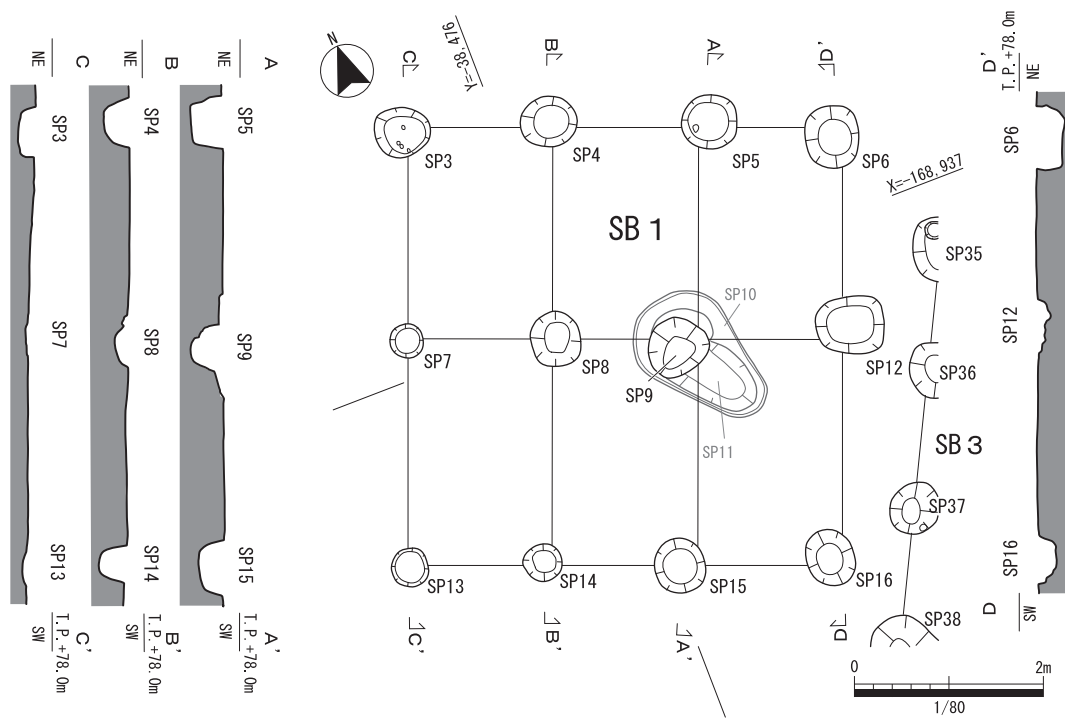
B区北西部分で検出した(図7)。一辺4mの方形で、南東辺をSK8、SP194・195に、南西辺をSP187に切られている(図15)。壁溝は北東辺の一部でのみ確認した。幅0.05～0.1m、深さ0.01～0.03mを測る。建物内では、小穴(SP190～192)を3基、土坑(SK13)を1基検出した。SP192は建物内中央部分の北東寄りで検出した。規模は、長径0.56m・短径0.5m・深さ0.3mで、平面は隅丸方形を呈する。遺構の位置から2本柱穴のうちの1基とも考えられたが、対になる柱は検出できなかった。SP190・191は建物内の北隅で検出した。SP192に比して小さく、長径0.32～0.42m・短径0.29m・深さ0.05mである。

遺物は、須恵器坏H(34)・壺・甕、土師器坏(35)・甕(36・37)が出土している(図14)。須恵器坏H(34)は口径10.6cmで、底部は残存していない。土師器坏C(35)は口径13.2cm・器高4.3cmで、内面に放射状の暗文が施される。甕は口縁部が直線的に開くもの(36)と外反するもの(37)がある。

(36)の口径は15.4cm、(37)は24.6cmで、(37)はSK13から出土した。

掘立柱建物

掘立柱建物は6棟検出した。主軸は、その角度に差異があるものの全て南東に振っている(図



SP24

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂～細礫混極細砂 (2. 5Y7/2 灰黄色砂質シルト⁷ ロック混じる。)
- 2: 2. 5Y6/3 1 にぶい黄色粗砂混砂質シルト (マンガ⁷ 斑あり。)
- 3: 2. 5Y5/2 暗灰黄色細砂混シルト (マンガ⁷ 斑あり。)

SP25

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂～細礫混極細砂 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト⁷ ロック混じる
- 2: 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (マンガ⁷ 斑あり。)

SP26

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂～細礫混極細砂 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト⁷ ロック混じる
- 2: 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (マンガ⁷ 斑あり。)

SP27

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂～細礫混極細砂

SP30

- 1: 2. 5Y6/2 灰黄色粗砂混極細砂 10YR4/1 褐色灰がまだらに混じる
- 2: 10YR4/1 褐色粗砂～極粗砂混極細砂

SP31

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂混極細砂
- 2: 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト⁷ (マンガ⁷ 斑あり。)

SP32

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂混極細砂

SP33

- 1: 10YR4/1 褐色粗砂混極細砂

図 16 掘立柱建物 SB 1・2 平面・断面図

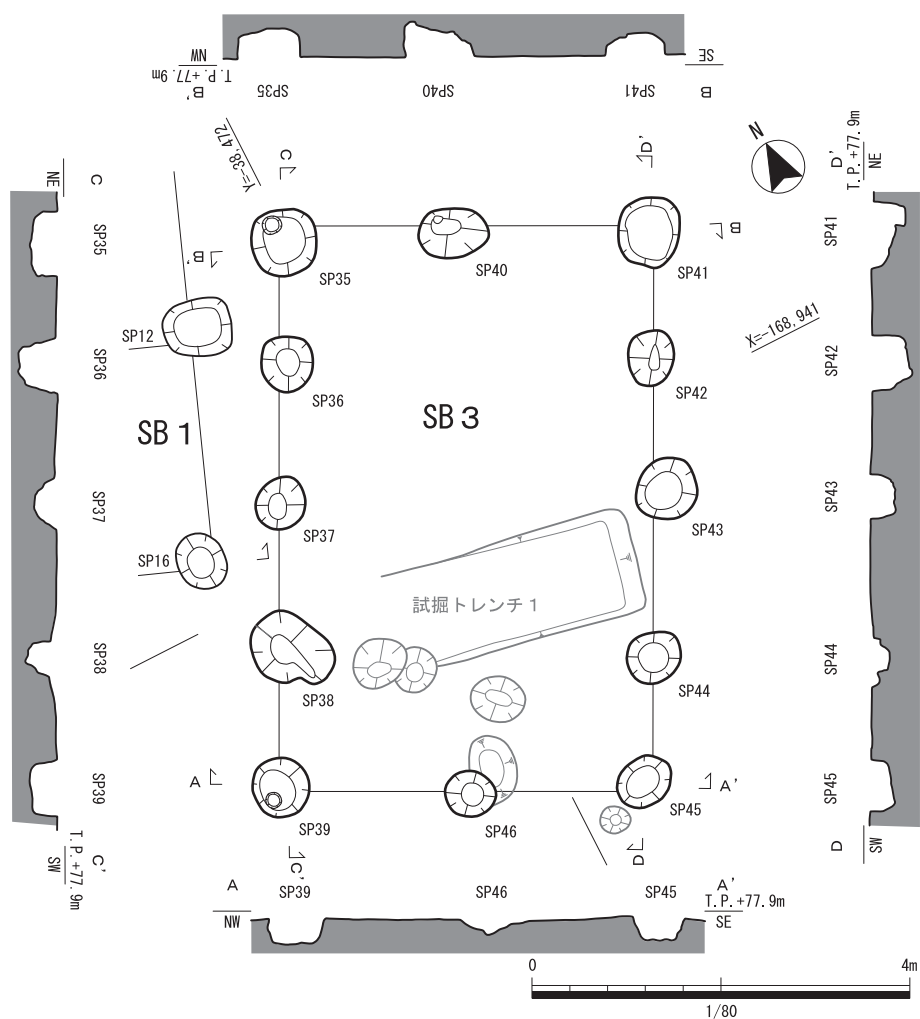


図 17 掘立柱建物 SB 3 平面・断面図

7)。また、一部の竪穴建物との切り合い関係をもつ柱穴はいずれも掘立柱建物が切っている。

SB 1 (図 7・16、図版 9-1)

A区西半で検出した(図 7)。柱穴SP 3～16から構成される、梁行 2 間(4.5m)、桁行 3 間(4.5m)の総柱建物である(図 16)。

柱穴の多くは直径0.4～0.5mの円形を呈し、深さ0.2～0.3mを測る。しかし、建物の南西半は著しく削平を受けており、特にSP13・14は、底の部分をわずかに確認したのみで、直径約0.3m、深さ0.02～0.06mであった。出土遺物は、SP15・16から土師器の細片が出土したのみである。また、SP 9・11の掘り方が不明瞭であったため、全体的に数cm段下げた際に、須恵器坏身片が 1 点出土した。

SB 2 (図 7・16、図版 9-2)

A区西半で検出した(図 7)。柱穴SP24～28・30～33から構成される、梁行 2 間(3.3m)、桁行 2 間(3.0m)以上の総柱建物で、調査区外(北方)へと続く。SP30は、隣接するSD 1 を切っている(図 16)。

柱穴SP27・30～33は直径0.3～0.45mの円形を呈し、深さ0.15～0.35mを測る。SP28は、長径0.78m、短径0.3～0.38mの楕円形を呈し、深さ0.28mを測る。北側列のSP24・25・26は、調査区外に継続する。SP26は直径0.33m・深さ0.24m、SP25は直径0.42m・深さ0.35mを測る。SP31は直径0.42mを測り、深さは0.32mである。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

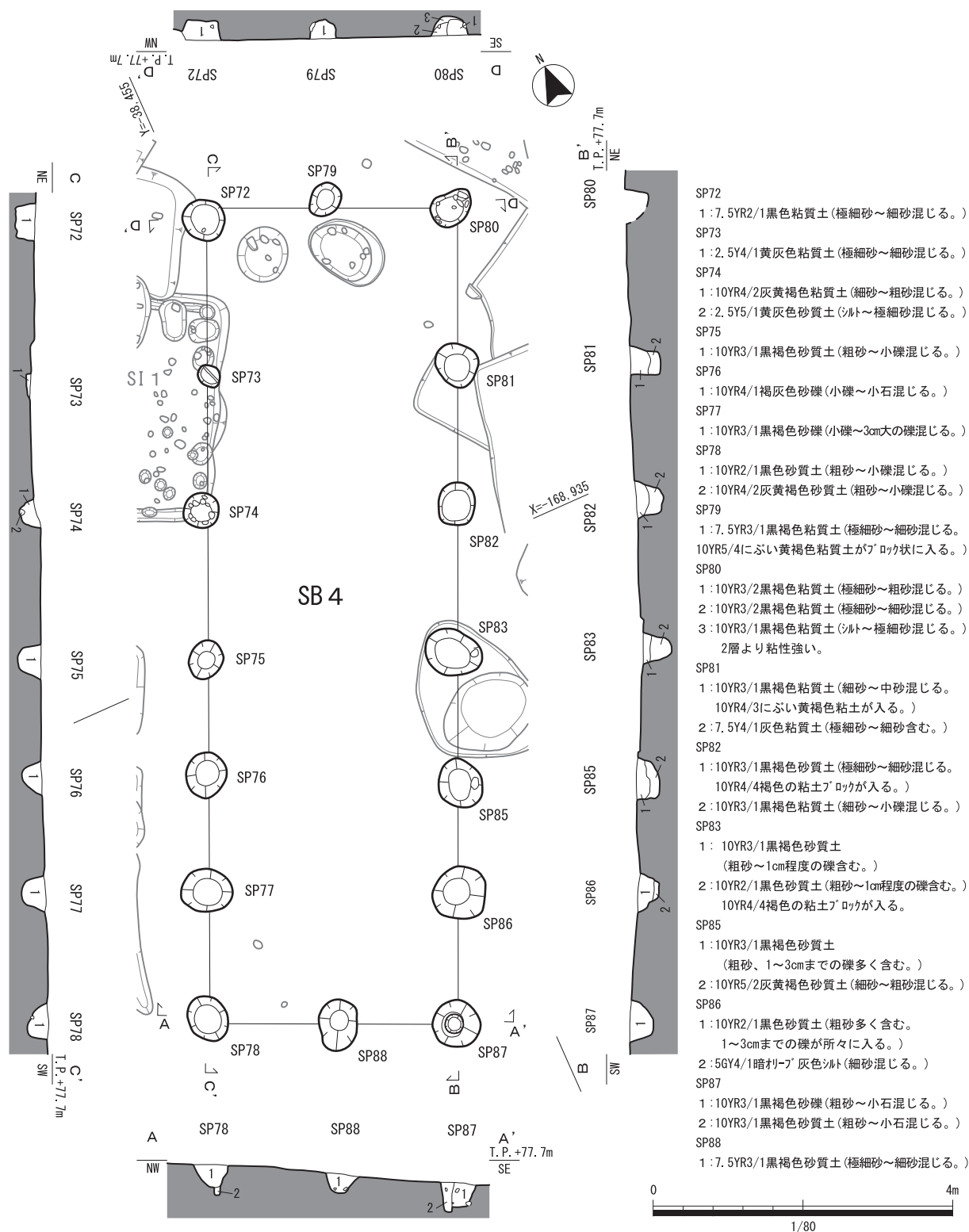


図 18 掘立柱建物 SB 4 平面・断面図

SB 3 (図 7・17、図版10-1)

A 区西半の SB 1 南東側で検出した (図 7)。柱穴 SP35～46 から構成される、梁行 2 間 (4.0m)、桁行 4 間 (5.8m) の側柱建物である (図 17)。ごく僅かに SB 1 より主軸を東へ振っている。SB 1 とは近接しており、距離は 0.8～1.0m である。

SP36・37・39・42～46 の平面は円形を呈し、長径 0.53～0.67m・短径 0.45～0.65m・深さ 0.18～0.42m

を測る。SP38・40の平面は楕円形を呈し、SP38は長径0.6m・短径0.4m・深さ0.26m、SP40は長径0.75m、短径0.62m・深さ0.38mを測る。SP38は事前調査時に検出した柱穴である。SP35・41の平面は隅丸方形を呈し、SP35は一辺0.69m・深さ0.34m、SP41は長径0.72m・短径0.65m・深さ0.34mを測る。SP35の北西角とSP39の南西角には小円形の柱痕跡が認められた。遺物はいずれも細片で図化し得ないが、SP36・42から土師器片、SP37から縄文土器片、SP38から土師器片と瓦器片が出土した。SP38から出土した瓦器片は事前確認調査の際に出土したもので、検出面直上の包含層からの混入の可能性があると考えている。

SB4 (図7・18、図版10-1)

A区の中央からやや東寄りで検出した(図7)。SP72～83・85～88から構成される、梁行2間(3.4m)、桁行6間(10.8m)の側柱建物である(図18)。西側の柱列のSP73・74はSI1を切っている。

SP72・74～76・81～87はいずれも平面が円形に近い形を呈している。SP73はその中で最も規模が小さく、長径0.36m、短径0.27m、深さ0.06mを測る。その他の円形を呈するピットは、長さ0.46～0.7m・短径0.43～0.69m、深さ0.22～0.4mとなっている。SP77～83・85～88は平面が楕円形で、規模は長径0.47～0.69m、短径0.38～0.58m、深さ0.21～0.32mとなっている。遺物が出土した柱穴はSP80からのみで、須恵器坏身細片が1点出土した。

SB5 (図7・19・20、図版11-1、12)

A区南東側で検出した(図7)。柱穴SP140(図版12-2)・144・146～156・158～161・170～172・174から構成される、梁行2間(4.8m)、桁行6間(10.7m)の総柱と考えられる建物である(図19・20)。桁行方向については調査区外へ延びており、さらに広がる可能性がある。柱穴の規模は最大のSP158で長径1.0m・短径0.8m・深さ0.57mを測り、最小のSP150で長径0.65m・短径0.62m・深さ0.43mと、他の掘立柱建物を構成する柱穴と比較すると大きい。竪穴建物SI7～9の埋土を切って柱穴が並んでおり、SB5が後出することが分かる。

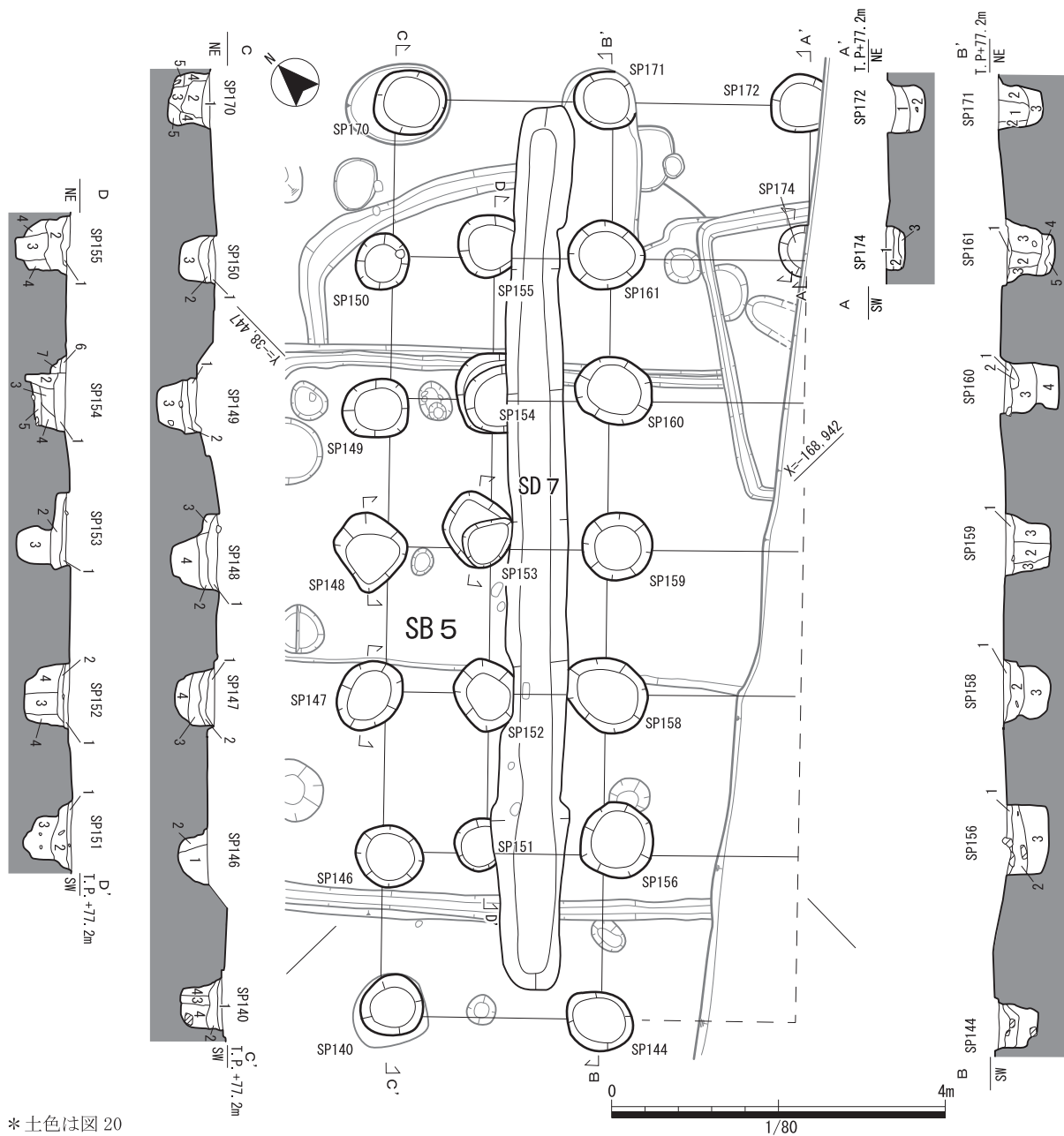
SP151～155(図版12-3)については、柱列の方向、間隔が他の柱列と合ってくることから関係する可能性があるとして取り上げた。ただし、側柱列に組み合う柱が無い。別建物の可能性も考えたが、建物として伴う柱列は確認できなかった。

出土遺物はSP151から土師器羽釜片と土師器の細片、SP160から須恵器坏片、SP153・158からは土師器の細片、SD7からは須恵器坏H・高坏・甕、土師器片、縄文土器片が出土している。

SP144～171の柱列に沿うように溝SD7を検出した(図19)。幅0.55～0.72m・長さ12.3m・深さ0.5mで(図版12-1)、端になってもほぼ深さは変わらず、水の抜ける先は無い。現場ではSD7を個別の溝状遺構として取り扱っていたが、掘立柱建物・竪穴建物の建物内に平行した溝が配される類例があったため(篠崎譲治2020)、ここでは建物に関連する可能性がある遺構としてSD7とSB5の検討を試みる。

静岡県駿東郡所在の横山遺跡は、7世紀後半から8世紀前半にかけての柵列に囲まれた掘立柱建物群が多数見つかった官衙的要素の強い遺跡であるが、現状では地方豪族の居宅とそれに伴う集落とされている。その一方で、壺鐙が新たに見つかったことから遺跡内での馬の飼養が考えられ、本遺跡を駅とする説もあげられている(静岡県教育委員会2003)。

この横山遺跡でみつかった掘立柱建物SH223は3間×8間の掘立柱建物で、建物内に柱列と平行して溝が配されている。溝は10基の連続した土坑を切っている。この溝・土坑の解釈については、溝は建て替えた「間仕切り」、土坑は建て替え前の柱穴掘形であるとしている(東日本埋蔵文化財研究会1998)。



*土色は図 20

図 19 掘立柱建物 SB 5 平面・断面図

この建物について篠崎讓治氏は、厩舎としての可能性を指摘している。それによると、建物内の土坑と溝は馬の尿溜めで、当初は個別の尿溜めであったものを溝状のものに作り替えたものだとしている。厩舎と推論つけた理由については、床面が緩やかな傾斜をとり、尿を集めやすい構造になっていること、ここでは詳しく記さないが、溝底が上り下がりを繰り返していることなどの要因から3つの堅穴が設けられていることなどをあげている。また、建物内で検出した杭状の小穴は、馬房を区切る柱穴として検討されている（篠崎 2010）。

先にも記したように今回調査した SB 5 は、建物内に収まる溝状の遺構を持つことについては厩舎と検証されている建物と似通っている。一方で、異なる点もある。

ひとつは SP151-155 の中柱列である。これらは厩舎の構成要素として復元するとすれば、先の横山遺跡の厩舎における馬房を区切る柱とすることができる。先の事例では小穴がその役を担っていたが、

A-A'	SP161	SP140
SP174	1:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混砂質シルト (2.5Y7/2 灰黄色細砂混砂質シルトのブロック・10YR6/6 明黄褐色中砂～粗砂混シルト混じる。)	1:10YR4/2暗灰黄色中砂～粗砂混砂質シルト (10YR5/6黄褐色中砂混砂質シルト (鉄分混じる。3～5mmの礫含む。))
1:10YR4/2灰黄褐色中砂～細礫混砂質シルト (2.5Y7/3浅黄色中砂混砂質シルトのブロック・10YR5/6黄褐色中砂～細礫混砂質シルト (鉄分混じる。パイン土含む。))	2:N4/0灰色中砂～粗砂混砂質シルト	2:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混砂質シルト
2:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混砂質シルト	3:N4/0灰色中砂～粗砂混砂質シルト (2.5GY6/1 11-プ 灰色中砂混シルト質砂のブロック混じる。)	3:2.5Y4/1黄灰色中砂粗砂混砂質シルト
3:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混シルト質砂 (10YR6/1灰色シルト混中砂～極粗砂)	4:N3/0暗灰色細砂～粗砂混シルト	4:2.5Y4/1黄灰色中砂～粗砂混砂質シルト (2.5GY7/1 暗11-プ 灰色シルト混極細砂～粗砂ブロック混じる。)
SP173	5:2.5GY6/111-プ 灰色シルト混細砂～粗砂 (N3/0暗灰色細砂～粗砂混シルトのブロック混じる。)	D-D'
1:10 YR4/2灰黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト (7.5Y7/1灰白色中砂痕シルトのブロック・10YR5/8黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト (鉄分混じる。))	SP171	SP155
2:10YR5/1褐灰色中砂～極粗砂混砂質シルト (7.5Y 7/1灰白色細砂混砂質シルトの小ブロック混じる。)	1:N4/ 灰色中砂～粗砂混シルト質砂	1:10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混砂質シルト (7.5YR4/6 褐色細砂～中砂混砂質シルト混じる1cmの礫・パイン土含む。)
3:10YR4/1褐灰色細砂～極粗砂混シルト質砂	2:N4/ 灰色中砂～粗砂混シルト質砂 (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混シルト質砂ブロック混じる。)	2:10YR5/1褐灰色中砂混砂質シルト
B-B'	3:N3/ 暗灰色中砂～極粗砂混シルト	3:10YR4/1褐灰色中砂～極粗砂混砂質シルト
SP144	C-C'	4:10YR4/1褐灰色中砂～極粗砂混砂質シルト (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混砂質シルト混じる。)
1:10YR4/2灰褐色中砂～粗砂混シルト (2.5Y7/3浅黄色粗砂混砂質シルトのブロック・7.5YR5/6明褐色中砂～粗砂混シルト (鉄分混じる。))	SP170	SP154
2:10YR5/1褐灰色中砂混シルト (10YR6/1灰白色中砂～細礫混砂質シルト・7.5YR5/6明褐色中砂混シルト (鉄分含む。斑に混じる。))	1:2.5Y5/1黄灰色細砂混砂質シルト (2.5Y7/2浅黄色中砂混シルト質砂のブロック・7.5Y5/6明黄褐色細砂～中砂混砂質シルト (鉄分混じる。))	1:10YR4/1褐灰色中砂混砂質シルト (3～5cmの礫・パイン土含む。)
3:2.5Y4/1黄灰色中砂～細礫混砂質シルト	2:10YR5/1褐灰色細砂～中砂混砂質シルト (N6/ 灰色中砂～極細砂混シルト質砂のブロック混じる。)	2:N3/0暗灰色中砂～粗砂混砂質シルト (1～5cmの礫含む 7.5Y6/1灰色中砂混砂質シルトブロック混じる。)
SP156	3:10YR4/1褐灰色細礫混砂質シルト	3:10YR3/1黒褐色中砂混シルト質砂パイン土含む
1:10YR4/2灰黄褐色中砂～細礫混砂質シルト (2.5Y7/2浅黄色中砂混砂質シルトブロック・7.5YR5/6明黄褐中砂～細礫混砂質シルト混じる1cmの礫・20cmの礫含む。)	4:10YR5/1褐灰色中砂～粗砂混砂質シルト	4:2.5Y4/1黄灰色中砂～粗砂混シルト質砂 (5GY6/111-プ 灰色中砂混シルト質砂のブロック混じる。)
2:10YR5/1褐灰色中砂～細礫混砂質シルト (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混砂質シルトブロック混じる。)	5:10YR4/1中砂混砂質シルト	5:N3/0暗灰色シルト混極細砂～中砂
3:10Y4/1灰色中砂～細礫混砂質シルト (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混砂質シルトブロック混じる。)	SP150	6:10YR5/1褐灰色細砂混シルト質砂 (7.5Y6/1灰色砂質シルトブロック混じる1～3cmの礫・パイン土含む。)
SP158	1:10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混砂質シルト (7.5YR4/6褐色中砂～粗砂混砂質シルト混じる。)	7:10YR4/1褐灰色シルト混極細砂～中砂 (2.5Y6/1灰色砂質シルトがぬに混じる5mmの礫・パイン土含む。)
1:10YR4/2灰黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト (2.5Y7/2 (浅黄色中砂混砂質シルトブロック・7.5YR5/6 明黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト混じる。5cmの礫・パイン土含む。))	2:10YR4/1褐灰色細砂～粗砂混砂質シルト (10Y6/1灰色細砂～粗砂混砂質シルトブロック混じる。)	SP153
2:10YR5/1褐灰色中砂混シルト質 (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混砂質シルトブロック混じる。細礫・5cmの礫・パイン土含む。)	3:10YR4/1褐灰色中砂混砂質シルト	1:2.5Y5/1黄灰色中砂～粗砂混砂質シルト (10YR6/6明黄褐色中砂混シルトのブロック混じる。)
3:10YR4/1褐灰色中砂～細礫混砂質シルト (2.5GY6/111-プ 灰色中砂～極粗砂混砂質シルトのブロック混じる。)	SP149	2:2.5Y4/1黄灰色中砂～粗砂混砂質シルト (0.5～1cmの礫・パイン土含む。)
SP159	1:7.5Y5/1黄灰色中砂～粗砂混砂質シルト (10YR6/6明黄褐色中砂混砂質シルトブロック・2.5Y7/1灰黄色砂質シルトブロック混じる。)	3:10YR4/1褐灰色細砂～粗砂混シルト質砂 (N6/0灰色シルト混極細砂～中砂のブロック混じる。)
1:10YR4/2灰黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト (2.5Y7/2浅黄色中砂混砂質シルトブロック・7.5YR5/6明黄褐色中砂～極粗砂混砂質シルト混じる。5cmの礫・パイン土含む。)	2:N4/0灰色中砂～中砂混シルト質砂にN6/0灰色中砂混砂質シルト	SP152
2:10YR4/1褐灰色中砂混砂質シルト	3:N4/0灰色細砂～中砂混シルト質砂	1:10YR4/2灰黄褐色中砂～粗砂混砂質シルト (2.5Y7/3浅黄細砂混シルトのブロック混じる。)
3:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混シルト質砂 (2.5GY6/1灰11-プ 色極細砂～中砂のブロック混じる。)	SP148	2:10YR4/1褐灰色中砂～極粗砂混砂質シルト (0.5～1cmの礫含む。)
SP160	1:2.5Y5/1黄灰色中砂～粗砂混砂質シルトに (10YR6/6明黄褐色中砂混シルトブロック混じる。1～5cmの礫・パイン土含む。)	3:10YR4/1褐灰色シルト混細砂～粗砂
1:10YR4/2灰黄褐色細砂混砂質シルト (2.5Y7/2灰黄色砂質シルトブロック混じる。)	2:N4/0灰色中砂～極粗砂混シルト質砂に (N6/0灰色中砂～粗砂混砂質シルトのブロック混じる。)	4:10YR4/1褐灰色シルト混細砂～粗砂 (N6/0灰色細砂～中砂混シルトのブロック混じる。)
2:7.5Y6/1灰色極細砂～中砂	3:7.5Y5/1灰色中砂混砂質シルト	SP151
3:10YR4/1褐灰色細砂～中砂混砂質シルト	4:N4/0灰色シルト混極細砂～中砂	1:10YR4/2灰黄褐色粗砂～細礫混砂質シルト (1～3cmの礫含む。パイン土含む。)
4:10YR4/1褐灰色細砂混砂質シルト (2.5GY7/1明11-プ 灰色細砂混砂質シルトのブロック混じる。)	SP147	2:10YR4/1褐灰色粗砂～細礫混シルト質砂 (1cmの礫・パイン土含む。)
	1:10YR4/2灰黄褐色中砂～粗砂混砂質シルト (2.5Y6/4 にぶい黄色細砂混シルトブロック混じる。パイン土含む。)	3:N5/0灰色シルト混細砂～粗砂 (2.5GY6/111-プ 灰色シルト混細砂～粗砂ブロック混じる。3～5cmの礫・パイン土含む。)
	2:10YR4/1褐灰色中砂～粗砂混砂質シルト (5mmの礫・パイン土含む。)	
	3:2.5Y3/1黒褐色細砂～極粗砂混砂質シルト	
	4:2.5Y3/1黒褐色シルト混細砂～極粗砂	
	SP146	
	1:10YR4/1褐灰色中砂～細礫混シルト質砂	
	2:10YR4/1褐灰色細砂～極粗砂混砂質シルト (2.5GY6/111-プ 灰色中砂混砂質シルトブロック混じる。)	

* 図 19 の土色

図 20 掘立柱建物 SB5 断面図土色

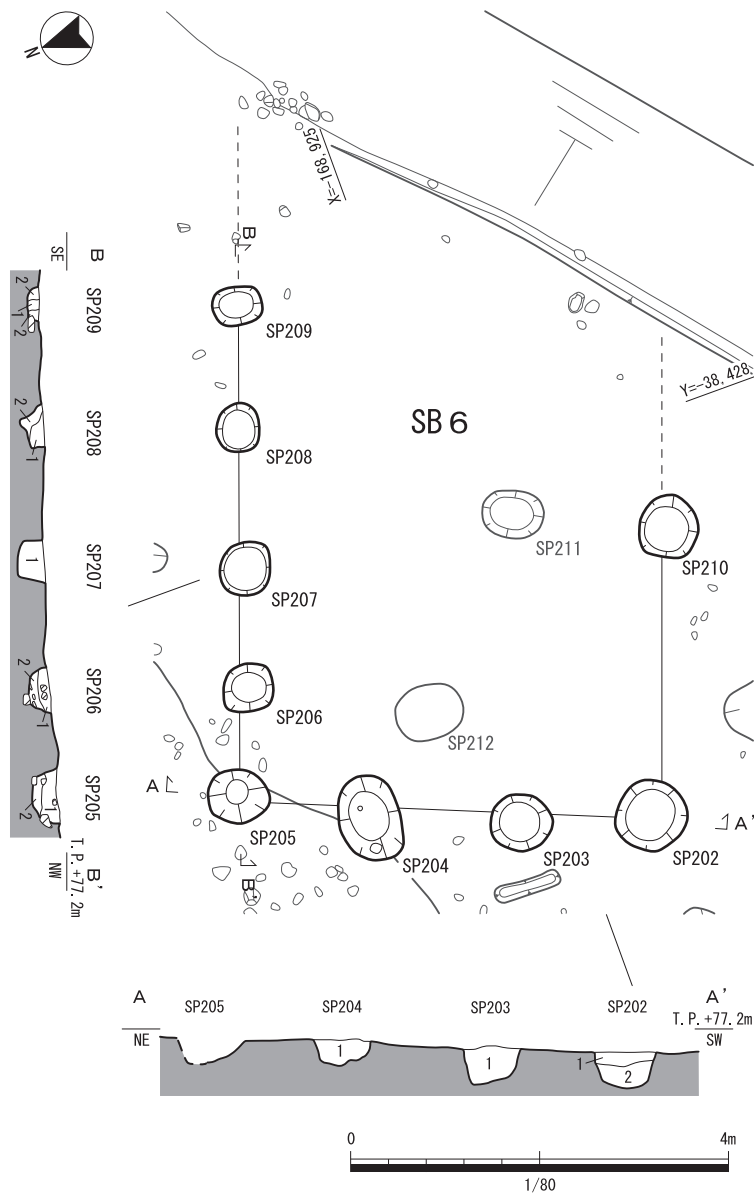
SB5 の場合は側柱と変わらない大きさの柱穴が使用されていることになり、遺構の規模が異なる。もしこれが馬房を区切る柱であれば、最大 6 室設けることが可能である。

他には、建物内が緩やかに掘り窪まる堅穴とそれに伴う溝底の傾斜が要素としてあげられているが、どちらも SB5 では確認できない。ただし、どちらも微細なレベル差であり、これらを意識しながら掘削をしなければ捉えるのが困難であったと思われる。特に SB5 については、周囲に広がる自然流路の影響により地中の水分の含有量が多く、本来馬が飼養されていれば出来たであろう硬質面や、溝底の凹凸も捉えきれなかった可能性がある。

SB5 を積極的に厩舎として復元するには材料が足りないが、錦織南遺跡の性格を考える上では重要な遺構となる可能性がある。

SB6 (図 7・21、図版 11-2)

B 区中央よりやや南西側で検出した (図 7)。柱穴 SP202～210 から構成される、梁行 3 間 (4.5m)、



- SP202
 1: 10YR3/1 黒褐色中砂～細礫混砂質シルト (5GY6/1 オリーブ 灰色粗砂混細砂～中砂のﾌﾞｯｸ少量混じる。)
 2: 5GY6/1 オリーブ 灰色 粗砂～細礫混砂質シルト (10YR3/1 黒褐色中砂～細礫混砂質シルトにだらに混じる。)
- SP203
 1: 10YR3/1 黒褐色粗砂～細礫混砂質シルト (5GY6/1 オリーブ 灰色粗砂～細礫混砂質シルトのﾌﾞｯｸ混じる。1～3cmの礫含む。)
- SP204
 1: 10YR3/1 黒褐色粗砂～細礫混砂質シルト (5GY6/1 オリーブ 灰色極粗砂混砂質シルトのﾌﾞｯｸ混じる。1～3cmの礫・ﾊﾞｲﾗﾝ土含む。)
- SP205
 1: 10YR3/1 黒褐色粗砂～細礫混シルト質砂 (1～10cmの礫含む。)
 2: 10YR3/1 黒褐色シルト混粗砂～細礫
- SP206
 1: 10YR3/1 黒褐色粗砂～細礫混砂質シルト
 2: 10Y5/1 灰色極粗砂混シルト～細砂 (10YR3/1 黒褐色粗砂～細礫混砂質シルト混じる。)
- SP207
 1: 10YR3/1 黒褐色極粗砂～細礫混砂質シルト (10Y5/1 灰色粗砂～細礫混シルト～極細砂混じる。)
- SP208
 1: 10Y2/1 黒色粗砂～細礫混シルト質砂
 2: 10Y5/1 灰色極細砂～中砂 (10YR3/1 黒褐色 中砂～粗砂混シルト質砂混じる。)
- SP209
 1: 10Y5/1 灰色粗砂混シルト質砂
 2: 10YR2/1 黒色粗砂～細礫混シルト質砂

図 21 掘立柱建物 SB 6 平面・断面図

桁行 4 間 (5.2m) 以上の側柱建物である (図 21)。後世の削平のためか、南西側の柱列ははっきりしない。

柱穴は平面が円形・楕円形を呈し、規模は長径 0.52～0.9m、短径 0.4～0.7m を測る。遺物は出土していない。

不明遺構

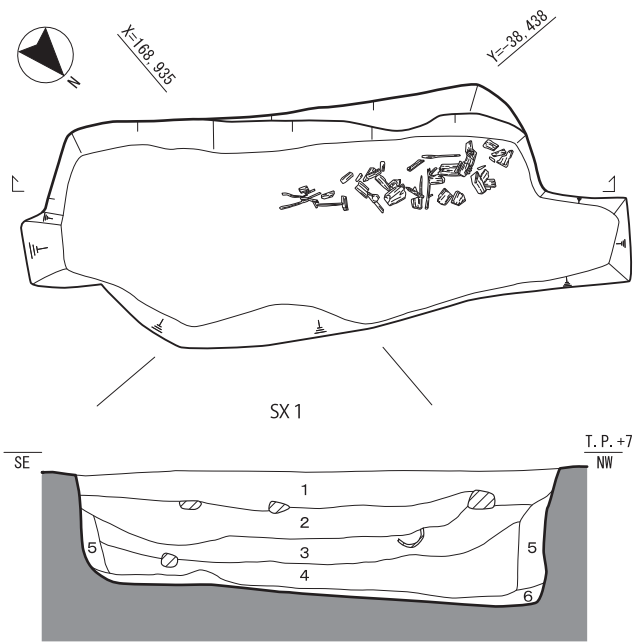
不明遺構として検出した遺構は 14 基あり、規模・性格は様々である。SX 1 (図 7・22・26・27、表 1、図版 13-1・2)

A 区と B 区の境界付近で検出した、隅丸長方形の遺構である (図 7)。長辺 2.6m・短辺 0.85m・深さ 0.72m で、ほぼ垂直に掘削されている (図 22)。主軸は北東方向に振っている。

埋土は一見して、ほぼ全面黒色のシルト質土であるが、砂粒の微細な差異から 6 層に分層した。埋土最下層に炭化物を多く含んでおり、さらに、埋土を除去した底面には、植物質遺物が散在している状況が確認された。掘形の側辺に沿って堆積している 5 層と、その中に堆積している 3・4 層などの状況、垂直に立ち上がる形状などから、枠状の構造物が設置されていたと考えられる。

埋土からは先に記した植物質遺物 (42～48)、須恵器坏身の完形品 (41) のほか、須恵器坏身・坏蓋・高坏・甕・ハソウか壺の体部片、土師器片、貝殻条痕をもつ縄文土器片が 1 点出土している (図 22)。

図化したのは須恵器坏 H (40・



SX 1

- 1: 5Y2/1 黒色中砂～細礫混砂質シルト(炭粒、直径1～10cmの礫含む。層の下半にかけて極細砂多く混じる。)
- 2: 7.5Y2/1 黒色粗砂砂質シルト(炭粒、直径1～5cmの礫多く含む。)
- 3: 2.5Y3/1 黒褐色中砂～粗砂混シルト(直径1～5cmの礫多く含む。)
- 4: 2.5Y2/1 黒色粗砂混シルト質砂(炭非常に多く含む。直径1～3cmの礫含む。)
- 5: 2.5Y4/1 黄灰色中砂～粗砂混シルト質砂(10Y4/1 灰色中砂～粗砂混シルト質砂のブロック混じる。炭粒、直径3～5cmの礫含む。)
- 6: 2.5Y3/1 黒褐色中砂～粗砂混シルト質極細砂(炭粒含む。直径1～3cmの礫非常に多く含む。)

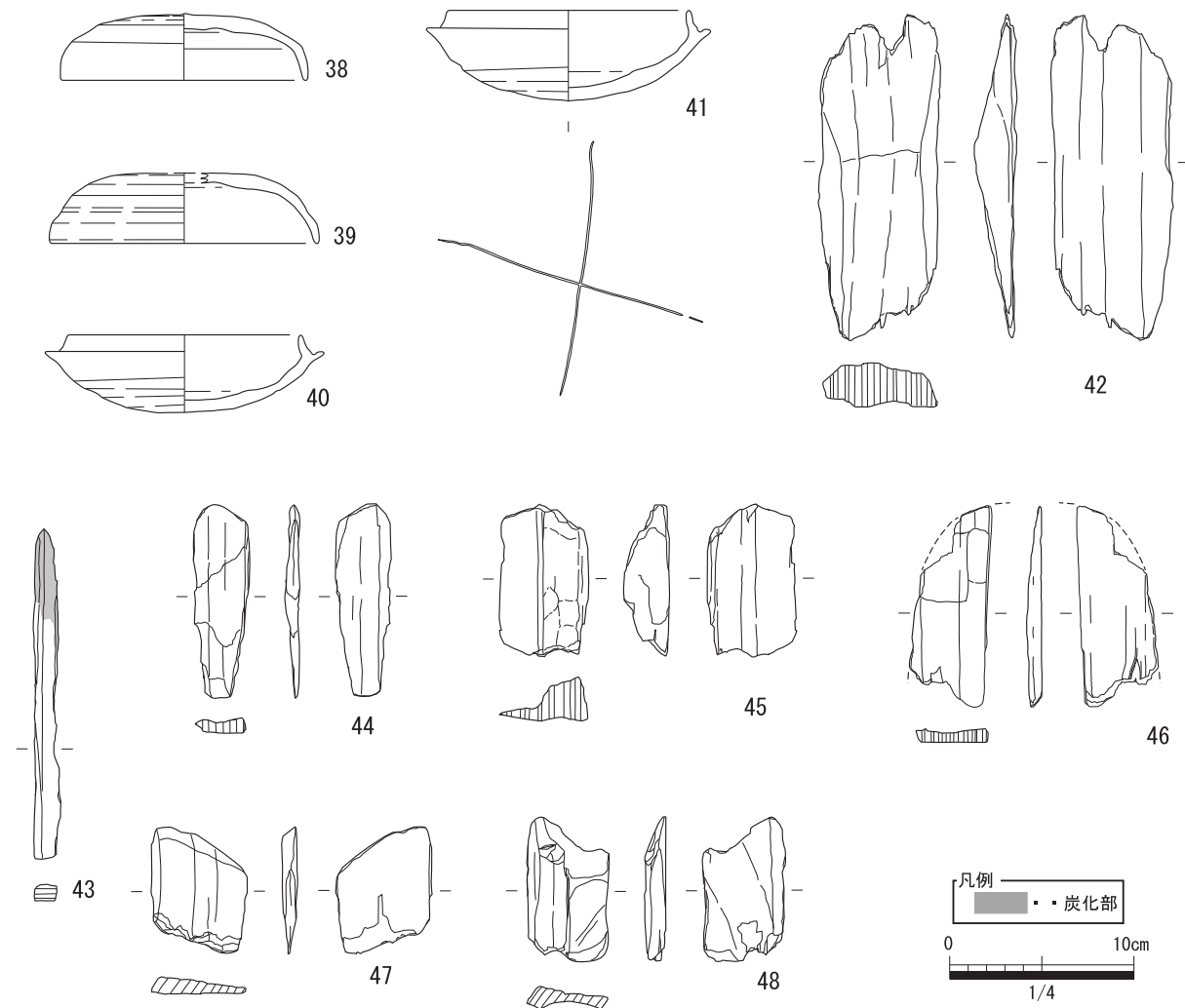
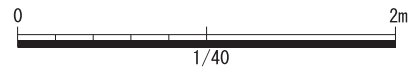


図 22 不明遺構 SX 1 平面・断面図、出土遺物実測図

41)、坏H蓋 (38・39)、植物質遺物 (42～48) である。須恵器坏H(40) は口径 12.6 cm・器高 4.2 cm、(41)は口径13.0cm・器高5.1cmで、底部外面に「×」のへら描きが施されている。坏H蓋(39)は口径14.4cm・器高3.6cm、(38) は口径13.2cm・器高3.8cmである。

植物質遺物については火を灯したり別の何かに火を移す際に使用されたと考えられる燃えさし片(43)のほか、製品もしくは切削時に出たとみられる木端(42・44～48)が大半である。これらについては一部樹種鑑定と保存処理を行った(第4章参照)。鑑定を行ったものはいずれも針葉樹で、マツ(43)とモミ(42・44～48)である。

遺構の性格については、当初は形状などから土壌墓と考えたが決め手に欠ける感が否めない。大きさも長辺2.6mと土壌墓としては大型である。古墳時代後期という時代からも、今回見つかった建物群が集落の居住域であれば墓域が近接するとは考えにくい。散在していた木片からトイレ遺構や木材加工・松明の後処理時のゴミ穴などの可能性も考えられるが、埋土の科学分析にまで至れなかったため、

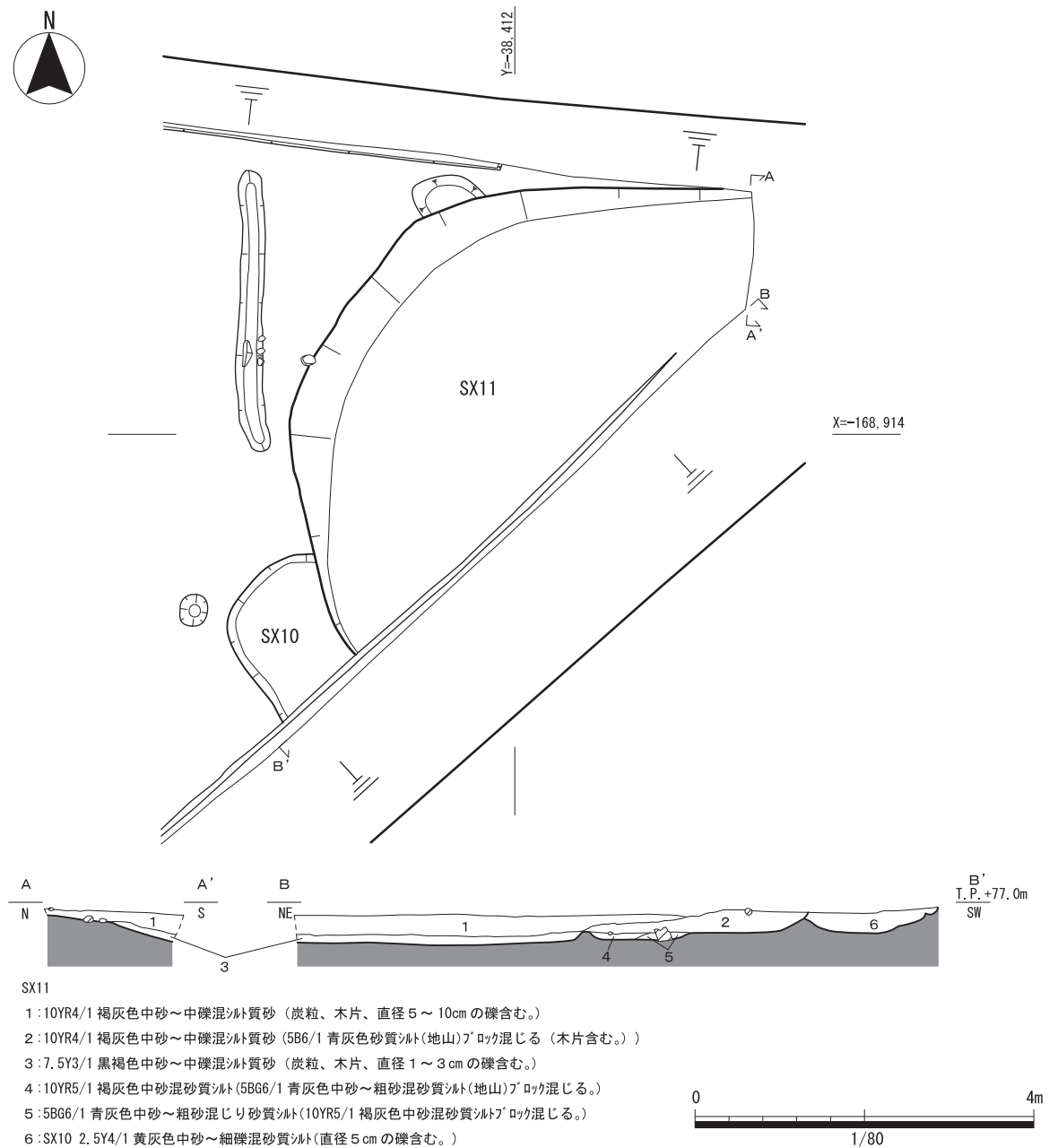


図23 不明遺構 SX11 平面・断面図

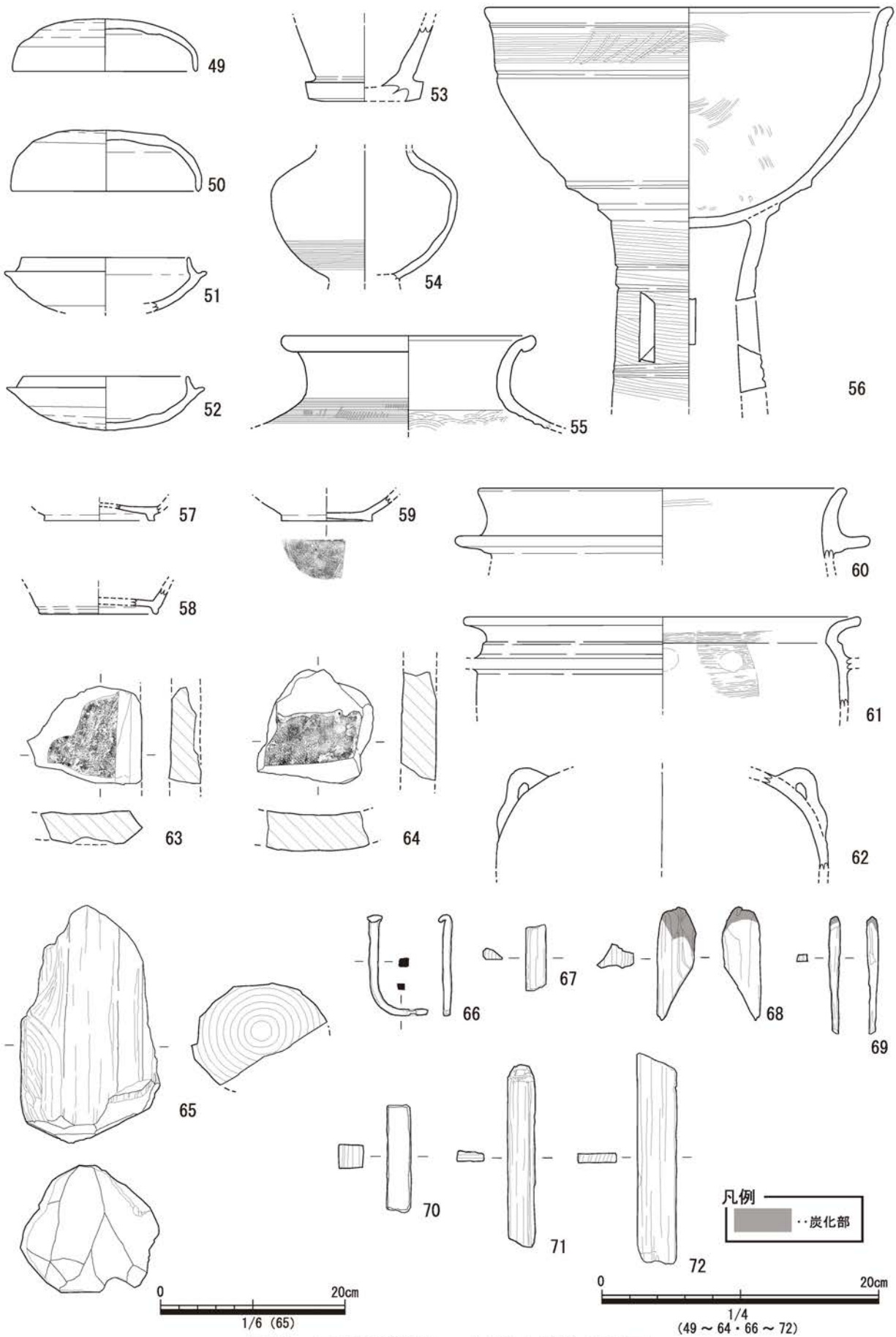


图 24 不明遺構 SX 2・11 出土遺物実測図
SX 2 (49 ~ 56)、SX11 (57 ~ 72)

その詳細については不明と言わざるを得ない。

SX2 (図7・24、図版13-3)

A区中央北側で検出した、不定形の落ち込み状遺構である(図7)。規模は、長軸5.87m・短軸3.35m・深さ0.69mで、周囲をSD1が方形に巡っていることや、その底面から小穴を複数検出したことなどから堅穴建物の可能性を検討した。しかし堅穴建物とするには規模が大きく、明確な材料は得られなかった。また、混入の可能性もあるが瓦器・瓦質土器が出土していることから年代が合わず、不明遺構として取り扱った。

埋土からは、須恵器坏H(51・52)・坏H蓋(49・50)・高坏・甕(55)・台付壺(54)・すり鉢(53)・器台(56)など、多様な器種が多く出土したが、土師器は高坏や細片がわずかに出土したのみである(図24)。

須恵器坏H(51)は口径12.0cmで、受部に重ね焼きの痕跡がある。(52)は口径11.8cm・器高3.9cmで、底部内面の同心円当て具痕をナデ消している。坏H蓋(49)は口径13.2cm・器高3.8cm、(50)は口径13.4cm・器高4.2cmで、どちらも天井部内面の同心円当て具痕をナデ消している。すり鉢(53)は底径8.0cmで、外面には焼成時の降り物が付着している。器台(56)は口径28.4cm・器高29.0cm以上で、脚部には6方向のスカシが入る。鉢部の外面は格子目タタキ後にヨコナデによる調整、内面は同心円当て具痕を一部ナデ消している。

このほか、縄文土器、瓦器細片1点、瓦質土器片1点も出土した。

SX11 (図6・23～26、表1)

B区北東端で検出した長さ3.1m以上の大型遺構で(図6)、遺構南東部は調査区外へ延びることから平面形は不明である(図23)。遺構はシルト質の砂で埋まっており、埋土からは土器類のほか、製品を含む植物質遺物が多数出土した。これらについては一部樹種鑑定と保存処理を行った(第4章参照)。出土遺物には、須恵器坏H・坏B(57・58)・坏蓋・甕・耳付壺(62)、緑釉陶器坏(59)、土師器羽釜(60・61)・甕、製塩土器、平瓦(63・64)、釘(66)のほか、植物質遺物(65・67～72)などがある(図24)。須恵器坏B(57)は高台径7.0cm、(58)は高台径8.4cmである。今回の調査で復元した建物理土からの出土品にはこの坏Bがみつかっていない。緑釉陶器坏(59)は底部径6.4cmで、底部に糸切り痕がある。緑釉陶器としたが、釉薬の層ははつきりせず、焼成不良と思われる。平瓦(63・64)は、凹面に布目が残る。植物質遺物(65)は、形状から建物の柱材として加工されたもの、もしくは加工途中のものと考えられる。

植物質遺物の大半はSX1と同様に用途不明のものであるが、燃えさしも認められた(68・69)。2点ともマツで、SX1の出土品(42)もマツである。また(65)はクリである。

土器類は摩耗しているものが多く接合もほとんどしない。出土遺物を概観すると、古墳時代の遺物も一定量含まれるが、緑釉陶器や平瓦などから平安時代の遺構と考えられる。

東日本埋蔵文化財研究会 1998 「横山・上横山」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』

静岡県教育委員会 2003 「横山遺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』

篠崎譲治 2010 『馬小屋の考古学』高志書院

第4章 錦織南遺跡出土植物質遺物の樹種調査結果

株式会社 吉田生物研究所

1. 試料

今回調査する試料は富田林市錦織南遺跡（NKS2013-1）から出土した用途不明品 15 点である（表 1）。試料のうち、試料No.19～25・53 は SX 1、No.13～18 は SX11 から出土したものである。調査終了後、これらの遺物は保存処理が行われている。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

サンプルの炭化材は数 mm 立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 4 種、広葉樹 2 種）の一覧を表（表 1）にまとめ、それらの顕微鏡写真（図 25～27）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（表 1—No. 19・20・22～25、図 26・27）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1～4 個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

2) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

（表 1—No. 16・21・53、図 26・27）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1～15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

3) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

（表 1—No. 17・18、図 26）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1～2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

4) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(表 1—No. 14・15、図 25)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で 1 分野に 2～4 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ (ヒバ、アテ) とヒノキアスナロ (ヒバ) があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(表 1—No. 13、図 25)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管 ($\sim 500 \mu\text{m}$) が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2～3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり (ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道 (西南部)、本州、四国、九州に分布する。

6) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

(サンプル、図 27)

散孔材である。木口では極めて小さい道管 ($\sim 50 \mu\text{m}$) が単独ないし 2～4 個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁穴が存在する。板目では放射組織は単列、高さ $\sim 1.5\text{mm}$ からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州 (茨城・石川以西南)、四国、九州に分布する。

【参考文献】

林 昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所

島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版

北村四郎・村田 源 1979 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社

奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」

奈良国立文化財研究所 1993 「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」

* 使用顕微鏡 : Nikon DS-Fi1

表 1 樹種同定結果一覧

試料 NO.	掲載番号	出土遺構	全 長	樹 種
13	65	SX11	22.0cm	ブナ科クリ属クリ
14	72	SX11	14.0cm	ヒノキ科アスナロ属
15	70	SX11	6.3cm	ヒノキ科アスナロ属
16	69	SX11	8.5cm	マツ科マツ属[二葉松類]
17	71	SX11	11.8cm	ヒノキ科ヒノキ属
18	67	SX11	4.0cm	ヒノキ科ヒノキ属
19	42	SX 1	17.7cm	マツ科モミ属
20	45	SX 1	8.2cm	マツ科モミ属
21	43	SX 1	18.0cm	マツ科マツ属[二葉松類]
22	46	SX 1	10.7cm	マツ科モミ属
23	47	SX 1	6.9cm	マツ科モミ属
24	44	SX 1	10.5cm	マツ科モミ属
25	48	SX 1	7.8cm	マツ科モミ属
53	68	SX 1	5.0cm	マツ科マツ属[二葉松類]
サン プル	—	SI 9	—	ツバキ科サカキ属サカキ

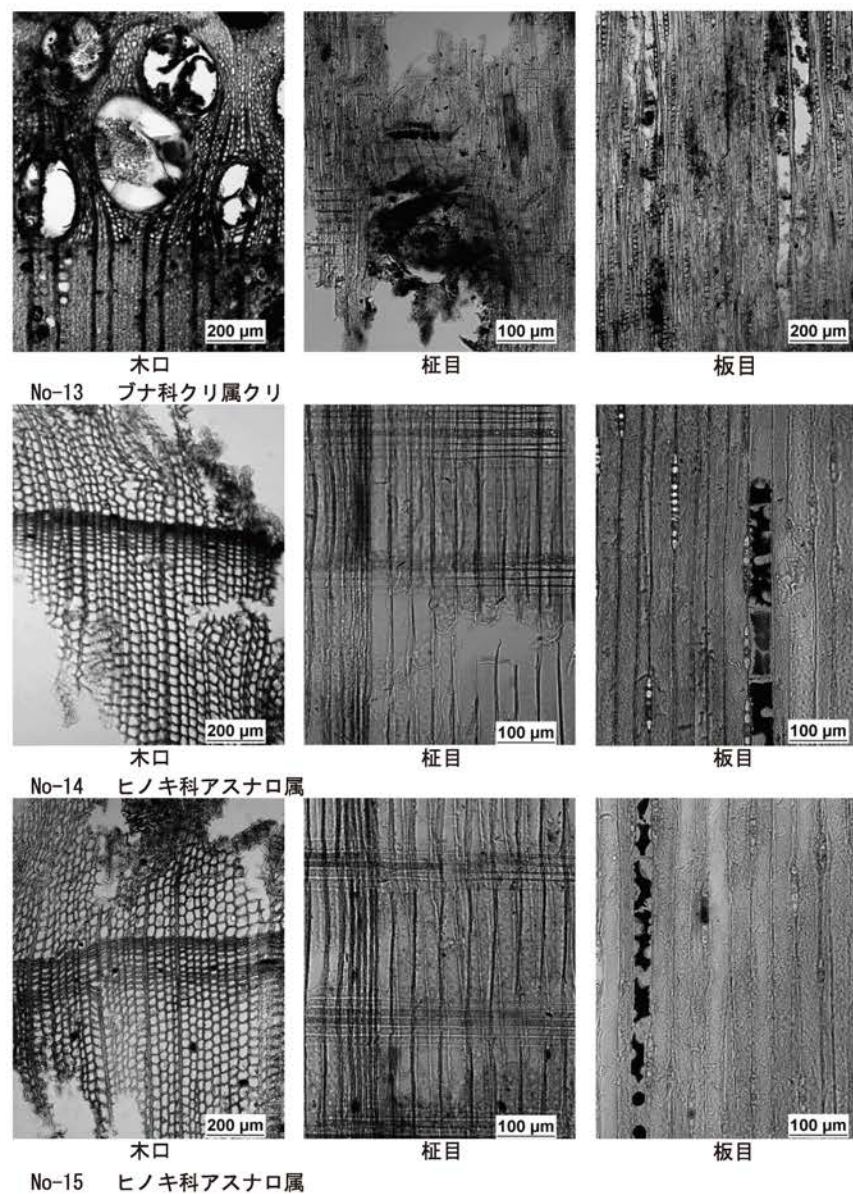
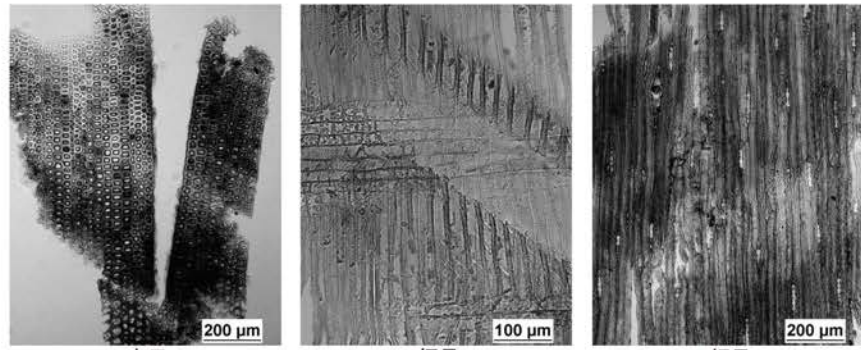
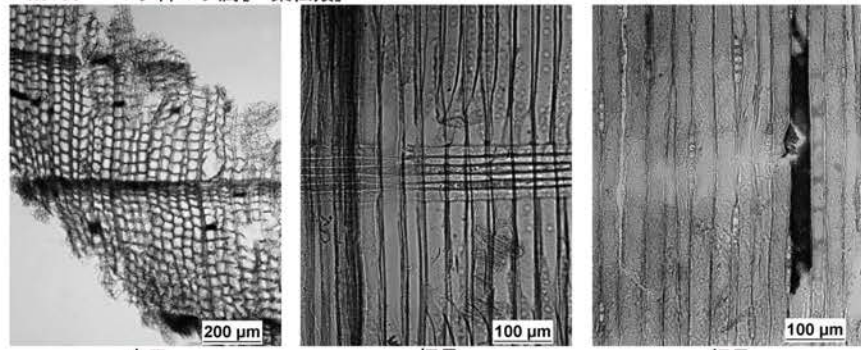


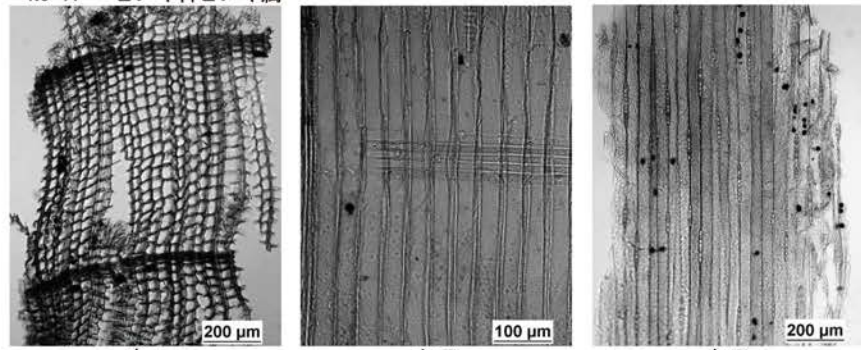
図 25 顕微鏡写真 (1)



No-16 マツ科マツ属 [二葉松類]

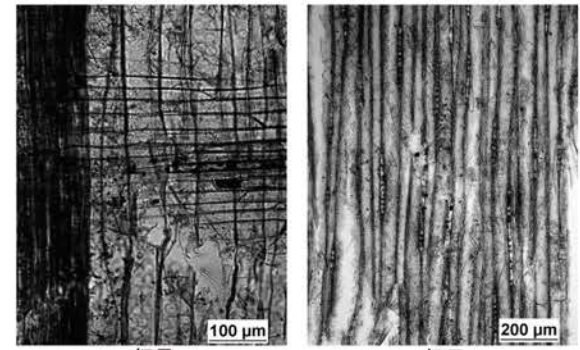
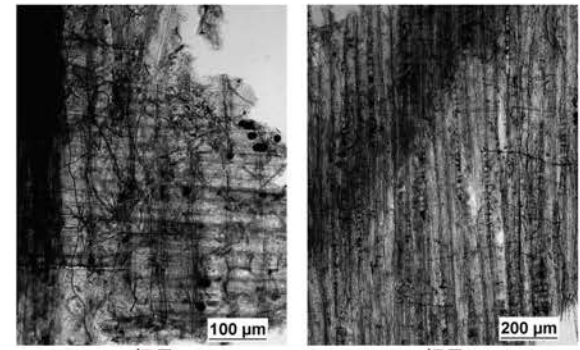


No-17 ヒノキ科ヒノキ属

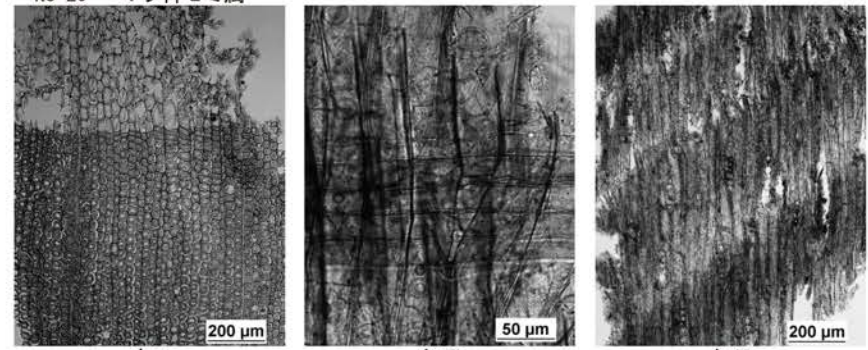


No-18 ヒノキ科ヒノキ属

No-19 マツ科モミ属



No-20 マツ科モミ属



No-21 マツ科マツ属 [二葉松類]

図 26 顕微鏡写真 (2)

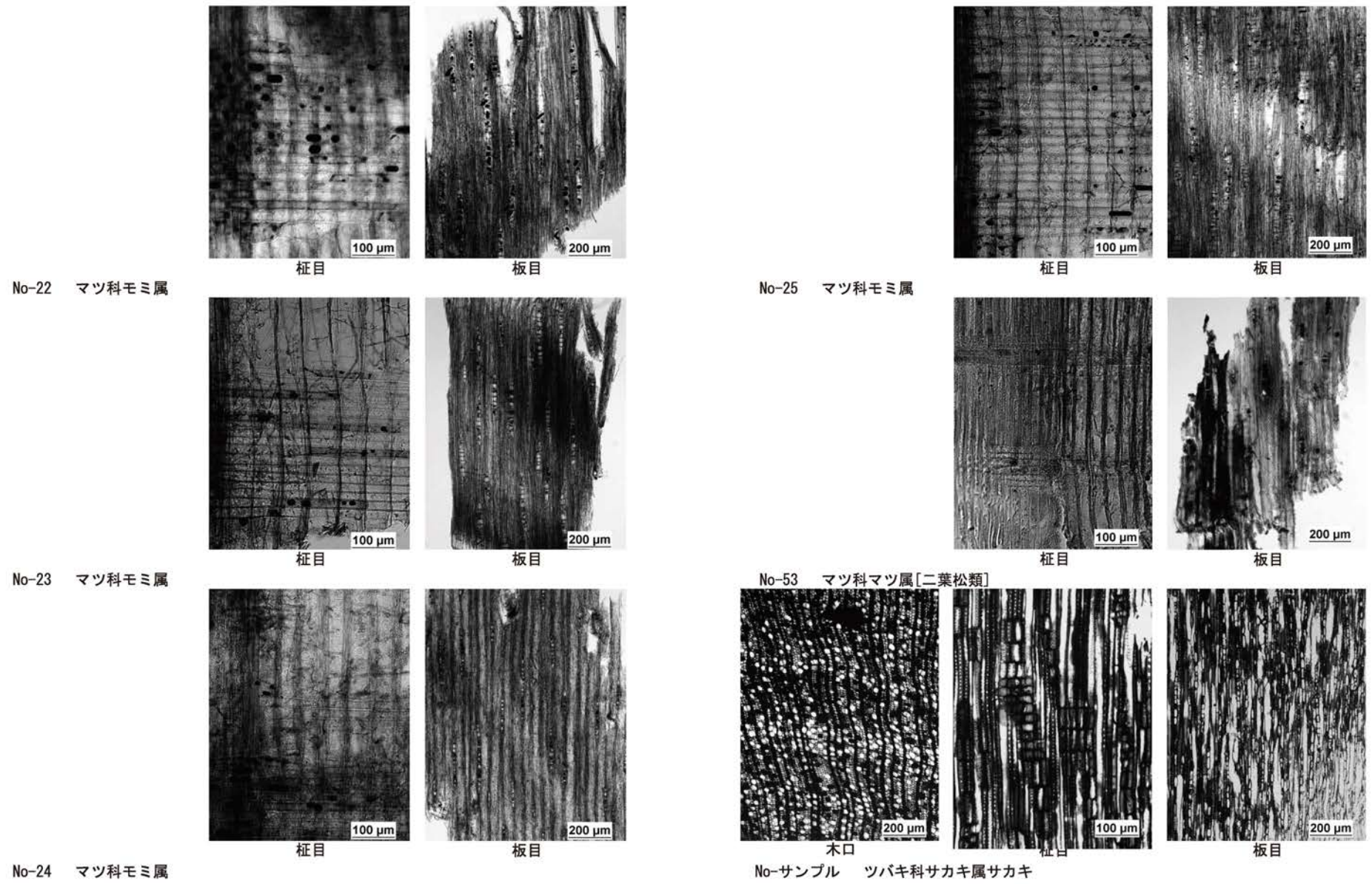


図 27 顕微鏡写真 (3)

第5章 まとめ

今回調査を実施した地点に近接した既往調査では、奈良時代から中世を主とした時期の遺構はわずかに検出されていたにすぎなかった。しかし、今回調査では、古墳時代後期の竪穴建物、さらに竪穴建物に後出する掘立柱建物を複数棟検出することができた。これは、錦織南遺跡の性格を検討する上で非常に重要な成果が得られたと思われる。また、調査期間の関係上トレンチ調査のみで終了した自然流路跡からは、縄文土器の出土を確認することができた。

縄文土器についてはいずれも細片であるものの、中津式などの縄文時代中期後葉まで遡るものが数点みられた。調査地周辺での調査においても、縄文時代後期の北白川上層式から晩期の滋賀里Ⅱ・Ⅲ式や大洞式の土器が出土していることから、当該時期の集落が周辺にあることを改めて強く示唆する資料となった。

竪穴建物については、建替えなどのため不明瞭なものも含めて少なくとも10棟確認できた。後出する掘立柱建物と並行する、もしくは連続するのかは定かではないが、掘立柱建物の柱穴からの出土遺物が極端に少ないことから、現時点ではほとんど時期差を見いだせない。これらの建物に関する出土遺物は、基本的に須恵器坏Hが主体で坏G・Bがなく、土師器は坏Cが出土している。ただし、遺構検出面より上位の堆積層やSX11など同一面の遺構からは奈良時代の遺物が出土していることから、掘立柱建物の存属時期については奈良時代までを含む可能性がある。

この掘立柱建物群を評価するうえで重要な要素となる可能性がある遺構として、掘立柱建物SB5があげられる。第3章で記したように、SB5を厩舎として復元できた場合、今回調査地は調査地東側に隣接して街道（東高野街道）が通っており、厩舎をもつには都合の良い場所といえる。

錦織南遺跡はこれまで、『書紀』に記された石川百濟村や、『倭名類聚抄』に見える河内国錦部郡百濟郷の一部として位置づけできるとされてきた（富田林市教育委員会1985）。仏教や馬の文化を伝えたとされる百濟からの渡来氏族との関わりを考えるうえで、馬の存在は重要な要素となり得る。SB5が厩舎となり得るかについては推測の域を出ないが、今後もその可能性を含め周辺での調査の際には注意し、近隣の遺跡である錦織遺跡や錦聖遺跡、錦織廃寺、細井廃寺などと併わせて、錦織という地域を考えていく必要がある。

【参考文献】

富田林市教育委員会 1985『富田林市史』第1巻

報告書抄録

ふりがな	にしこおりみなみいせき
書名	錦織南遺跡
副書名	福祉施設建設に伴う発掘調査（NKS2013-1）
巻次	
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	73
編著者名	水久保祥子 渡邊 晴香（編）
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL0721-25-1000（代）
発行年月日	2021（令和3）年8月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
にしこおりみなみいせき	にしこおりみなみいち・にちょうめ	27214	139	34° 28' 36"	135° 34' 54"	20130917 ～ 20131226	2,002 m ²	確認調査
錦織南遺跡	錦織南一・二丁目							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
錦織南遺跡	集落跡	縄文 ～中世	自然流路 土坑 溝 竪穴建物 掘立柱建物	縄文土器 須恵器 土師器 瓦 金属製品 木製品	縄文土器の出土により、近隣での縄文時代集落の存在を後押しする材料となった。 古墳時代後半以降の竪穴建物・掘立柱建物がまとまって見つかった。